
BLACKMOON

流羽奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B L A C K M O O N

【Nコード】

N O 3 0 1 G

【作者名】

流羽奈

【あらすじ】

現世に居る死神が次々と殺されていく…。犯人探しのために冬獅郎と乱菊は現世へと行った。

プロローグ

漆黒の刃を持った死神が、敵に向かって駆けて行った。その敵は、俺たちよりもはるかに強い。そんな事、あいつにだって分かってるはずだ。

「止めとけ！死ぬぞ！！」

いつの間にか、俺は叫んでた。そうでもしないと、あいつは止まらない様な気がして。叫んだところで、止まる奴じゃない。そんなことは分かりきってるのに、俺は叫んだ。

「黒崎！！」

その声はただただ反響するだけだ。あいつの目には今、『護るべきもの』しか映ってない。真剣な眼差しだった。黒崎の姿が、俺の目に映り込む。

次の瞬間。

黒崎の身体から、真紅の血が、まるで噴水のように噴出していた。

「っ…」

目を開けると、一気に風が吹きぬけた。その風で書類が何枚か机から落ちる音がする。それを、誰かが拾い上げた。

「あ、隊長。起きました？」

「…松本？」

…さっきのは夢か。松本の呑気な声を聞いてそう思う。頭に手をやると、かすかに蒸している上に湿っている。どうやら相当な悪夢を見ていたようだ。汗の量が多すぎる。俺は机に目をやり、残っている仕事の量を見る。

「…よし」

立ち上がり、机に向かう。その途中で、松本に声をかけられる。

「どうしたんですか、その汗！？今、冬ですよ！？」

んな事分かってる。俺だって知りてえくらいだ。何でこんなに汗をかいているのか。そもそも、いつの間に俺は寝てしまったのか。そして…

「あの夢…」

つい、言葉になる。松本は俺のその独り言をしっかりと聞いていて、「夢？」と聞いてきた。こいつに聞かれると厄介だ。俺は肩越しに松本を見て、「何でもねえよ。仕事の邪魔になるからやらねえなら出てけ」と言い放ち、椅子に腰をかける。ため息をついて、机の上を見ると、見慣れないものがあつた。

「…ん？何だよ、これ？」

資料の中で、異常に目立つ、馬鹿でかい紙が乗っかっていた。こんなもん、俺が寝るときには無かったぞ…。手にとって、ザッと目を通す。

「…連続、殺人…だと？」

滅多に起こらない、死神の連続殺人。何年ぶりだよ、こんなの…。俺の記憶にもほとんど無いから、ここ百年間は起こってはいないはずだ。

「らしいですね。あたしの耳にもそんな情報は入ってきてなかったんですけど」

松本の情報網は果てしなく広い。そんな奴の耳にも入ってきて無い、ということは…。

「ちょっとやそつとで終わるようなモンじゃねえ…か」

資料を読み続ける。殺されたのはすべて現世に行っていた死神ばかりか。共通点はそのくらいだな。俺は資料を読んで、粗方の事を脳内でまとめる。

風が吹いてまた資料が飛んでいくが、そんな事にかまってなんかられない。物事には優先順位があるって事だ。

「松本。これ持ってきたの、誰だ？」

「総隊長直々に」

蕎麦饅頭を食いながら、俺の方見ずに呑気にそう言う。総隊長直々、か。久しぶりだな。現世に送り出されたとき以来だ。日番谷先遣隊として現世に派遣された事を思い出す。

「松本、今すぐ出る。準備しろ」

「…はい」

食べかけの蕎麦饅頭を皿の上において、松本は立ち上がった。
俺も椅子から離れ、氷輪丸を手にする。何時ものように肩にかけ、扉を開けた。松本が後ろから追いかけてくる。

「…嫌な予感がするな」

「そうですか？ あたしは楽しみなんですけど♪」

やけに楽しそうな松本を見て、直感する。全くコイツは…何のために現世に行くのか分かってんのか…？ 念のため、いや、確認のために俺は言うておく。

「言つとくが…隊費での買い物は許さねえぞ」

松本からのブーイングをサラリとかわして、死覇装の襟元を整えた。さっきから吹いている風が、俺の髪を撫でる。励まされてるのか、遊ばれてるのか…。どっちだか分からない。

「何してやがる！ 早く来い！」

モタモタしている松本にそう言って、腕を組む。

「隊長、歩くの早いですよお！ もう少しゆっくり歩いてくれても…」
「時間が無えんだ。急ぐぞ」

キッと睨んで、松本を咎める。松本は小さくなって、「はあい…」とだけ小さく言った。

「…」

ため息をついて、息を吸い込む。そして、一歩、歩み出た。

歓喜と狂喜と

現世に出ると、相変わらず霊子が薄いな、とは毎回思うが、今回ほど薄いと思った事はない。

胸が強く締め付けられているみたいに呼吸が苦しくなる。

霊圧が抑えられている上に、今の俺の状況。

もしとんでもなく強い奴に鉢合わせしちまったらたまったもんじゃない。

「隊長、どうしたんですか？ 顔色悪いですよ」

松本が後ろから話しかけてくる。

どうやらこいつはなんとも無いらしい。

となるとこれは…

——俺の勘違い？

そんな言葉が脳裏を過ぎった。

でも、この感覚は確かに身を染みて伝わってくる。

この感覚が間違いのはずが無い。

「隊長？」

松本の声にハッと我に返った俺は、顔を上げる。

「どうしたんですか？ らしくもない…」

「何でもねえよ。こっちだ、ついて来い」

俺が一步踏み出そうとした瞬間に、とんでもない霊圧が俺達の上にあらずしりと圧し掛かってきた。

——この…霊圧…っ！？

俺は反射的に辺りを見渡す。

氷輪丸に手をかけて、目をつぶり、神経を極限まで研ぎ澄まさせる。

「！」

ハッと目を開き、瞬時に刀を抜いて、上空に飛びのいた。

風が俺の左頬を真横を通る。

「てめえ…何者だ？」

返答は無い。

——危なかった…。

ギリギリで飛びのく軌道を修正していなかったら、確実に頭が飛んでいた…。

俺がさっきまで居た場所に、誰かが居る。

風が通った左の頬を、手の甲で拭う。

「松本、平気か？」

右側に視線を寄せ、松本が無事な事を確認する。

松本はキッとこっちを睨み、「それはこっちのセリフです！」と俺に言ってくる。

どうやら全くの無傷のようだ。

ほっとしたのもつかの間、俺の視線はさっきの霊圧の主の方へ向く。

「…隊長」

「ああ…。もしかすると…」

——例の連続殺人犯かもな。

そう言おうとした時には既に俺の眼前には刃があった。

「…！」

身体をそらし、刃をかわす。

何だ…この瞬発力…。

斑目か…更木程にも匹敵しそうなその瞬発力に驚いていると、不意に声がした。

「その羽織…隊長格か…」

聞いた事の無い、その声。

俺はそいつに向かって叫んだ。

「何者だって訊いてんだ！」

俺はそいつの片腕を掴み、間合いを一気に縮める。

俺が刀を掲げた瞬間。

目と目が…合った。

「隊長！」

松本の声が、やけに遠くに聞こえる。

一体何メートル離れてやがんだ…。

声の方向に視線を向けるが、ぼやけていてはつきりと見えるものは何も無い。

「一人終了」

歓喜と狂喜に包まれたかのような、そんな声が俺の耳に入ってくる。初めはその意味がよく分からなかったが、それもすぐに理解する事

になる。

俺の身体は、見事に貫かれていた。
鮮血で純白の隊首羽織が赤に染まり、腹部の辺りに激痛が走った。
指先が麻痺し始める。

「松本！」

さっきより確実にぼやけている景色の中に、松本らしき人物を見つ
ける。

「逃げろ！！」

力の限りに俺は叫んだ。

俺が一瞬でこんな手傷を負ったほどの敵だ。

松本一人じゃ：相打ちどころじゃ済まないことになる。

「――！！」

松本の口がかすかに動く。

だが、俺の耳には届かない。

一気に気が遠くなって、闇が徐々に現れてくる。

俺の景色は、そこで途切れた。

血塗れ

まったく…不意打ちで氣い失うなんてな…。

隊長失格だぜ…。

松本は無事か…？十番隊で隊長に引き続き副隊長まで死ぬなんて前代未聞だ…。

あいつ…ちゃんと逃げたのか…？

「つて…」

俺は腹を少し押さえつけながら無意識に起き上がった。

…ここは…。

「おう、起きたか、冬獅郎？」

「…黒崎？」

黒崎の、部屋か。

暗い部屋でぼんやりと見えるオレンジ色の髪の毛で、声の主を確かめる。

声なんか、今の状態では聞こえていないに等しいからな。

「井上が頑張ってくれたんだぜ？あとで礼言っとけよ」

「ああ…」

「でもまだ完全に治せてないらしいから…ムチャだけはすんな」

そうか…。

井上織姫が俺の傷を治してくれたのか。

とにかく、コレで最悪の事態は防ぐ事になった。

…待て。

松本は何処に居る？

普段だったら俺が起きた瞬間にちよっかいでも出してきそうな奴が、何でここに居ない？

「松本…松本はどうした？」

「ああ、乱菊さんか。あの人なら呑気に井上と買い物に行ってるぜ」「ケガはしてなかったのか？」

「ああ、無傷だよ。血塗れのお前抱えて、一番近かった俺の家まで速攻やってきたんだぜ」

——あんだけ言ったのに結局買い物に行きやがったな…あいつ…。そんな事を思っただけで黒崎の話を聞いているうちに、腹の痛みの波が短くなってくる。

俺は恐らく顔をゆがめていたのだろう。

心配そうに、黒崎が話しかけてきた。

「お前…大丈夫か？」

「っ…ああ…。問題無え…」

内臓が幾つかいってやがるな…。

確かに、この身体じゃムチャなんかできやしねえ…。

「井上が言うには、その傷口の部分に妙な霊圧の壁があって拒絶が仕切れ無かったって言ってた。井上も結構辛そうだったから俺が帰らせただけ…もう一回呼ぶか？」

携帯電話、確かそう呼ばれるものを取り出した黒崎を、俺は制した。

「いや…大丈夫だ。こんなもん、すぐ治る」

「けど、お前…」

黒崎はそこで言葉を止めた。

ブラウンの目が、俺を見ている。

呆れたようにため息をつかれ、「分かったよ」と吐き捨てるように言う。

「お前の性格はよく分かってるつもりだ。そこまで言うなら呼ばねえよ」

そう言って、携帯電話をしまう。

顔つきが、変わった。

コイツの事だ。

何があったか聞き出してくるに違いない。

「…なあ、冬獅郎。」

——来た——。

「何があった？」

俺の目をしっかりと見て、そう聞いてくる。

死神代行に言うような、そんな軽い任務でもねえ。

それに、関係の無い奴は極力巻き込みたくない。

死者が——増えそうな気がする。

そんな嫌な予感が、あの紙を見たときからあった。

「お前に言うような事じゃねえ」

俺は視線を逸らし、黒崎の机に立てかけられていた氷輪丸に移す。肩掛けの部分に少し血がにじんでいるのが、この薄暗い部屋でもよ

く分かった。

あの時、俺は貫かれていたんだ。

…あの、刃で。

改めて、そう実感する。

「あのなあ：確かに俺に言うような事じゃねえけど：お前がいくら不意打ちだからってこんな大怪我負ったんだ。ほっとけるかよ」

「ほっとけ。死神代行に言う筋合いは無え」

静かにそう言い放ち、黒崎の返答を待つ。

黒崎の体の中の血管が幾つか切れる音がしたのは、恐らく気のせいだろう。

「とにかく、貴様ごときに手助けをしてもらう必要性はない」

黒崎の返答が無かったので、俺はそう言う。

腹の傷を、さっきより強く押さえ込んでいた。

「手助けしようなんて思っちゃいねーよ」

俺の言葉に、そう返してくる。

黒崎は俺の死覇装を見て、ため息をついた。

「ったく…」と小さく言うのと、あらかじめ準備していたのか、机の引き出しから真っ白の包帯を取り出した。

「巻いとけ。巻けるだろ、こんくらい」

「…うるせ」

投げられた包帯を片手でキャッチし、死覇装の上だけを脱いだ。血が死覇装のほとんど全体に染み渡っている。

こんだけの出血量で生きているのは、恐らく井上織姫の能力のおかげだろう。

包帯を巻き終わると、俺は再度横になった。

横になった方が、痛みが少し緩和するような感じがする。

黒崎に対して背を向けるように横になった俺は、黒崎に話しかける。

「世話になった。明日には出る」

「そのケガで出るつもりかよ？」

その問いには答えずに、俺は静かに目を閉じた。

手荒な治療

明日の朝。

そう言ったが、今の俺に朝の明るい光が似合うとはとても思えない。気分的に——そう。

この漆黒の闇に紛れて、黒崎の家を出て行きたかった。そのほうが、今の俺には似合う。

「…っ…」

出来るだけ衝撃を殺して窓から飛び降りたつもりだったが、やっぱり未だ不完全。

さすがに包帯巻いたくらいじゃ傷は塞がらねえか…。痛みの波が傷を中心に、湖畔状に伝ってきた。

（草冠の時も、こんな感じだったな…）

今はもう亡き級友、草冠を今、この状況で思い出す。あの時と状況が限りなく近い気がする。

（って…何思い出してんだ、俺は…）

腹の具合を見ながら、徐々に歩くスピードを上げて行く。

瞬歩は間違いなく使えない。

視界も少し霞んでる上にこの暗さ。

後ろから襲われたら間違いなく…

（死ぬ——…）

そう思った瞬間、急に視界が真っ暗になった。
…これは…

「松本…てめえな…」

「隊長、何してんですか、こんな所で？」

目隠しに使っていた松本の手を払い除けて、後ろに振り返る。

「そりゃこっちの台詞だ！お前、今まで何して…」

急に怒鳴ったせい、それとも怒りで興奮したせい…とにかく傷が一気に開いたのが分かる。

グツと死覇装の上から傷の部分を押さると、一気に冷や汗が出た。

「ほら、だから言ったじゃないですか。何してんですか、って」
「……」

これじゃ立場が普段とまるっきり逆だ。

とにかく何か言い返してやろうと思ったが、今の状況でそんな気の利いた言葉なんて考える事も出来なかった。

「隊長、失礼します」

「は？」

今の状況で何を失礼しようと言うのか。

いや、それ以前に何をするつもりなのか。
何も今の状況に脳が付いていなかった。

「縛道の四、這縄」

「…！」

…待て。

こいつは何を考えてやがる…？

少なくとも怪我人にするようなことじゃねえだろ…。

「…暴れると次、一気に飛んで六杖光牢にしますよ？」

「…鎖条鎖縛じゃねえぶん、マシって事かよ…」

軽く呆れながら、大人しく縛られとく。

鬼道を自力で解くのは相当キツイからな…。

それに、この霊圧は…

「織姫…！早く！」

「ら…乱菊さん、速すぎるよ…」

俺の傷を治すなら先に言えよ…。

こんな手荒な事しねえだろ、普通…。

少し呆れながら、松本を睨む。

松本はそれに気付かないふりをしながら、井上と話していた。

（…覚えてろよ…松本…）

そう思いながらも、心の隅で、感謝はしていた。

こんな真夜中に井上をたたき起こしたんだろうが…。

そこだけは同情する。

せっかくの睡眠を邪魔しちまったな…。

事が済んだら謝っとくか…。

「それじゃ、冬獅郎くん、治療始めるね！」

「ああ…」

元気な声でそう言われる。

あまりに唐突だったから、つい空返事になってしまった。

松本は、それを面白そうに眺めていた。

どれくらい時間が経ったのか分からないが、傷は完全に癒えた。

傷を治してくれた本人は疲れていたのか俺を治し終わったと同時に
卒倒、眠りについてしまった。

…もともとこういう奴なのか？

こんなにも緊張感が無い奴なのか？

利きたい事はたくさんあるが、当の本人が寝ているのでそれはもう
聞けない。

まあ、どうでもいい事だけだな。

「松本、お前は井上を連れてこいつの家に帰して来い」

「分かってますって！」

そう言いながら井上を抱え、背中に背負う。

「隊長も付いて来て下さい？」

「…何でだよ？」

腕を組んで、若干怪訝そうに俺は聞く。

松本は呆れ顔で「当たり前じゃないですか」と言ってくる。
普段抜けてる松本が珍しく真面目な顔で。

（——ああ…そうか…）

何となく見当は付いた。

真偽を確かめる為に、松本に訊く。

「…松本。…俺が気を失ってから、何があった？」
「…はい」

承知したようにそう頷き、「織姫の家に行ってからでいいですか？」と背中に居る井上を気遣いながら、俺に聞いてくる。

「当たり前だろ…」

俺は一気に緊張感が抜けてしまった。

手荒な治療（後書き）

インフルエンザでダウンしておりました…。

楽しみに更新を待っていてくださった方々、申し訳ございません…

（^^；

完全？復活です！

これから楽しんでいってくださいね♪

真相

井上を静かに布団の上に置いた松本は、扉をゆっくりと閉め、外に出てきた。

ほう…と静かに息をついたのが分かる。

それくらい静まり返っていた。

俺は結論を少し急ぐように、松本に聞いた。

「何があつたんだ？」

「まず、あの男があたしを狙わなかった理由から話します」

松本は扉に少し寄りかかり、真面目な顔で、そう言う。

俺はそれに静かに頷き、松本を見た。

「あの男の所在や名前などは一切不明ですが、一つだけ、分かったことがあります」

「…」

俺は黙って松本の話を聞く。

松本は全く相槌をしない俺に対して、普段どおりに話し続けていった。

「隊長が刺されて、気を失った直後。あたしは隊長の下に駆け寄って、隊長の身体を受け止めました」

…気を失った直後。

その言葉を聞いて、あのときの俺の無力さをまた実感する。腕を組んでいた俺は、死覇装の裾を力いっぱい握った。

「そしてその後。男とあたしと、数秒の睨み合いがあったんです。あたしはもちろん、次はあたしの番だと思ってましたから灰猫を構えてました。隊長を片腕に抱えながら、ですけど」

まるで俺が護廷十三隊の隊長だとは思えなかった、とでも言いたげな表情だ。

だが、実際そうだったのは事実。

俺は松本の視線から逃れるように視線をそむける。その時。

少し冷たい風が吹いて、俺の隊首羽織がはためいた。

松本の蜂蜜色の髪も風に流される。

月が雲に隠れた。

淡い光が消え、本物の闇になる。

「どうやら、あの男：現世にいる死神の中でも、強い死神から順に狙っていつているようです」

「…何？」

そうなる…黒崎はどうなる？

俺が来る前だったら、この地域では黒崎が一番強いはずだ…。

いや、例えば俺が来ていたとしてもあいつの強さは未だ未知数…。

殺るなら黒崎が先になるんじゃない？

「その事、本当なのか？」

「はい。あの男、あたしを見ながら『隊長がこんなもんじゃ、お前はクズだな。倒す価値も無い』って言ったんです。その言葉から推理するに、更木隊長みたいな人じゃないかと…」

まさかそこで更木の名前が出てくるとは思わなかったが、俺は少し納得してしまう。

弱い者には興味がないって事か…。

「その言葉言われた時あたし、もうかなりムカついて…」

「あー、分かった分かった」

叫び始めそうだった松本を適当に鎮めて、考え始める。

(強い者にしか興味がない…)

黒崎は相当の力を秘めているはず…。

隊長格三人も倒したくらいだ。

力の強さは俺達、隊長格にも値するほど…。

だがその力の強さは未だ発展途上で、完全ではない。

そして、連続殺人の犯人と思われるその男は強い死神を求めている…。

「…そうか…」

「何か分かりました？」

松本が興味津々に聞いてくる。

何処と無く楽しんでそうだな、こいつ…。

俺は松本に少し呆れながら、口を開く。

「松本。お前の言う事が本当だとしたら…ヤツの狙いは恐らく黒崎だ」

「一護ですか？ どうして？」

少しは自分で考える事を覚えろ、と言ってやりたいところだが、今はそうも言ってもらえない。

俺は早口で話し始める。

「黒崎の強さは、お前もよく理解しているはずだ。ここで殺られるなら普通に考えて黒崎が一番最初…。そういう事になるのは分かるな？」

松本は黙って頷く。

俺はそれを確認して、話し続けた。

「だがあいつの強さは未だ不完全だ。恐らく、その男は黒崎の力が完全になるのを待っている可能性が高い。つまり――」

「一護の近くに居る可能性も高い、って事ですか？」

「ああ。黒崎から聞いたんだが、あの時、一番近い家が黒崎の家だったから、そこまで俺を運んだんだろ？」

「はい、そうです」

月が雲から出てくる。

一気に影が足から伸びてきて、俺の影が壁に映った。

「黒崎の家の近くに俺達が着いた瞬間に、あの男が来たってことは…少なくともあいつは、常に近くで黒崎を監視している可能性が高い」

俺がそう言うと、松本は「成程…」と頷いて、扉から離れた。

「つまり、一護ん家の近くに居れば良いわけですね？」

「あいつを捕まえるには、それが手っ取り早いな…」

俺がそう言った瞬間に、松本は地面を勢いよく蹴り上げて、空中に着地した。

あの野郎…。

せっかちすぎるんだよ…。

「善は急げ、ですよね？」

そう言って、俺に背を向けた。

そして、次の瞬間に、俺の視界からあいつは消えてしまった。

「…急がば回れ、だろ…」

呆れながら、俺は松本の後を追いかけた。

緊張感

「おい、松本！てめえ、もう少し緊張感ってもんを…」
「持ってます持ってます！隊長は心配しすぎなんですよ！」

自分が狙われないって言う確証がねえくせによくもあんなに能天気
でいられるな…。

ある意味、凄いだろ、あいつは…。

「もうすぐ黒崎の家だ！せめて斬魂刀だけは構えとけ！」

そう言って、空中を蹴る足に、少し力をこめた。

(よし…)

身体の傷は完全に癒えてる。

これならなんとかあいつが来ても大丈夫だ。

…不意打ちだけはされねえようにしねえとな…。

俺はそう思い、神経を限界まで研ぎ澄ませる。

今感じるのは、松本と黒崎の霊圧。

そして、遠くに井上や浦原などのいわゆる『現世組み』の霊圧。

あいつの霊圧は——感じない。

少なくとも、今のところは、な。

「隊長、一護、起きてますけどどうします？」

「起きてるのか？」

俺は黒崎の家の窓へ、視線を向ける。

電気がついており、中では黒い影がゆらゆらと揺れている。

カーテンが閉まっっていて、中までは見えないが、起きているのは確かだ。

「どうするって…お前、どうするつもりだよ？」

俺の質問には答えずに、松本は窓の近くまで飛び降りる。

窓の鍵が開いているのを確認すると、俺の方を向いてにやりと悪そうに笑った。

「一護——っ！！！」

…予想通り…。

黒崎の驚いた声が聞こえ、松本は何のためらいもなく黒崎の部屋に入って行く。

少し経ってから、窓から松本の手だけが伸びてき、俺に向かって手招きをした。

俺は少し躊躇しながら、そこに近づいて行く。

なにしろ、黙って抜け出したからな…。

少なくとも怒鳴られる事だけは覚悟しとくか…。

窓のさんに足をかけ、中腰の状態で黒崎の部屋をのぞく。

「おう、冬獅郎。無事か」

「ああ、まあな」

少し予想外の展開だったが、あまり動揺する事も無く、事を流す。

『無事か』と聞く辺りから心配はしていたのだろう。

俺が出て行くのを恐らく予想をしていたのか、あまり慌てたような様子は無かった。

俺の血が付いたシートなどは当に片付けられている。

どんな言い訳をして洗ってもらったんだか…。

「あの：な。言っちゃあ悪いんだけど、乱菊さんの説明じゃイマイチよく分かんねえんだ。冬獅郎、説明してくんねえか？」

俺が待たされた数分は、どうやら松本が黒崎にさっきの俺の推測を話していたから、らしい。

感じからして、黒崎は全く状況を理解出来てはいない。

松本の説明がよっぽど下手だったのか、ただ単にこいつに緊張感が無いだけか：それとも。

松本もこの事態を理解していないか。

この三択に絞られる可能性が高い。

：一番最後の選択肢が一番しっくり来るのは俺だけだろうか。

「しょうがねえな：。松本、お前ももう一回聞いとけ」

「あたし、聞きましたけど」

「聞け」

最終的には半ば強引に松本に命令し、渋々聞く松本を怒鳴り散らし、黒崎には細かく今の状況を説明した。

説明してから何時間経っただろうか。

普通なら長くても数十分で終わるような内容が、こいつらの場合その何倍以上もかかる。

手間の焼ける奴らだ：。

だが、俺の必死の説明もあってか、やっと理解した二人に、俺はため息をついた。

「とにかく、黒崎はこれからしばらく神経を尖らせとけ。お前の警護は俺と松本が引き受ける」

「ああ。ありがとな」

黒崎にそう言って、松本に目配せをする。

腰を上げて、窓のさんに足をかけた。

足に力を入れて、空中へと飛び出る。

それに、松本が続いた。

「あーあ、何か眠いですねえ」

やっぱりコイツは、緊張感が無い。

つくづくそう思った。

やる時はやる奴なんだが：どうも締りが無え気がする…。

俺はそう言う松本を完全に無視して、真っ黒な道をただ進んで行った。

どうにかするから…

ったく…この「ねくたい」とやらはホントにキツイな…。

何で付けなきゃならないんだか。

片手で緩めて、第一ボタンを外す。

…いっその事…このねくたい、とっちまうか。

そう思っで一氣に下に引こうとすると、松本が急にストップをかける。

「なんだよ？」

「ダメですよ、ネクタイとっちゃ！」

「はぁ？」

「隊長、髪は何色ですか？」

何言い出すんだ、こいつは？

目の前にちらついている自分の髪をちょっと見て、「銀…」と答える。

「はい、じゃあこのワイシャツの色は？」

「白」

そう言って、ポケットに手をつ突っ込む。

義魂丸があるのを確認してから、松本の話に耳を傾けた。

「ネクタイ取ったら完全に真っ白じゃないですか！そういうの、『色気が無い』って言うんですよ？」

何を言ってるんだか。

福になんてこだわらなくていいだろ…。

大体、遊びじゃねえんだからな…。

そう思いながら、俺は松本をキッと見上げる。

「はい、付ける付ける♪」

「あ、こら！」

何なんだ、この速さ…。

ものの数秒で俺の首には先ほどと同じようにねくたいがくくり付けられていた。

でもやっぱりキツイから、片手でクイツと緩めて、再度ポケットに手をつ込んだ。

「何でわざわざこんな格好しなきゃならねえんだよ…。死覇装のままで外から見張ればいいじゃねえか」

俺が思ってたことをそのまま口にすると、松本はぐいっと俺のねくたいを引っ張って、俺に顔を半ば強引に近づける。

松本の顔に、薄い笑みがこぼれた。

「な…なんだよ…」

俺は視線を逸らす。

こういう顔をしている松本は何を言い出すかたまたまもんじやない。

絶対に、何かとんでもねえ事を考えてる。

そんなことくらいは、よく分かる。

けど、何を考えてるかは、未だに分からない。

「そうやって文句ばかり言う割には、今朝、頑張ってネクタイ結んでましたよね？」

「…っ…」

野郎ッ…。

なんでンな事までしってんだよ…っ！

きつと俺の顔は、耳まで赤くなってたんだと思う。

松本が噴出した。

そして、ねくたいから手を離れたかと思うと、腹を抱えて大笑い。

「はははははっ！！隊長、意外にすぐ顔に出るんですよっ！！あはははははは！」

握りこぶしが、勝手に震えているのに気が付いた。

俺は必死にその震えを押さえ、でもイライラした声を隠さずに、

「オラ、行くぞ！」

そう、声を荒げた。

「あーっ！冬獅郎くん！」

「織姫〜！会いたかったわあ〜！」

井上の、明るい声が俺の鼓膜を振るわせた。

俺に話しかけてきたはずなのに、松本が返事をする。

大体、何が「会いたかった」だ。

昨日会ってたじゃねえか。

隊長である俺の危機を適当に流して、買い物しに行ってたじゃねえか。

俺の怒りがまた湧き上がってくる。

「ん？冬獅郎と乱菊さん？」

不意に後ろから声がした。

俺を呼び捨てにする人物なんて、たかが知れてる。

…黒崎しかいねえ…。

「日番谷隊長だって言ってるだろうが！」

さっきまでの松本に対する怒りを、黒崎にぶつけてしまう。

…やっちゃった…。

呆然としている黒崎と、フツと目が合ってしまう。

「あ…悪い…」

ばつが悪そうに、俺はそう言って顔を背けた。

「冬獅郎？どした？」

「ああ…いや…」

俺が松本のほうに少し視線を向けると、黒崎は分かったようにああ、と少し声を漏らした。

「…にしても：俺、ホントに狙われてんのか？全ッ然霊圧とか感じねえんだけど…」

「何だ？常に監視されてるような視線があった方がいいのか？」

俺がそう言ってやると、黒崎は口ごもって、そのまま口を閉じた。

「…何かあったら、俺がどうにかする」

貫かれた感覚が未だ残っている腹部に手を当てて、自分に言い聞かせるようにそう言った。

短気

その感覚を感じたのは、もう太陽も沈むかという頃の、茜色に街が染まった瞬間だった。

今まで並んで歩いていた黒崎達とも、いつの間にか間が空いている。俺が、立ち止まっていたから。

立ち止まるな、という方がむしろ難しいかもしれない。

俺にとっちゃ、この霊圧は一つの『手がかり』なのだから。

不意に、上空を見上げた。

でも、何も居ない。

——気のせい、か？

何も無いのは、何度も確認したから分かってる。

でも…この感覚は…あいつの…感覚。

かけがえのない、唯一の手がかり。

それを感じたからには、もう逃がすわけにはいかない。

「おい、冬獅郎！どうした？」

遠くで声が聞こえる。

黒崎だ。

距離は既に百メートル近くは離れていた。

「ん？あ、ああ…何でもねえよ」

少し詰まっていた気がするけど、まあ何とかごまかせるだろう。

俺は駆け足で黒崎たちの方へ向かう。

神経を尖らせて、茜色の空を見上げる。

この茜色が、どこと無く血のように見えた。

「……」

…どこからこの霊圧が来ているのか分からない。
辺りに反射しているみたいだ。

この霊圧を発している物体の場所が全くつかめない。

そういう術を使っているのか、それとも霊圧そのものが大きすぎて
俺が感知しきれないだけなのか…。

少しでも何かつかめないかと、俺は終始辺りを見回していた。

徐々に、人通りが少なくなる。

茜色が濃い赤に変わって、暗くなっていた。

風も少し冷たくなり、黒崎は少し肩をすくめていた。

その瞬間、さっきの感覚が一層強くなる。

背筋が逆なでされたような感覚が走り、一瞬、固まりそうになった。
けど、そんなことは言ってらんねえ。

俺は反射的に黒崎のワイシャツの襟を引っ張り、後ろに無理矢理倒
した。

チリッというとても小さな音が鳴って、黒崎のオレンジ色の髪が少
し空中へ散る。

「…な…」

黒崎は何が起こったのか理解出来ずに驚いているばかりだった。

ただ、自分が『危険』だという事は多少なりとも理解しているらし
い。

それだけは分かった。

——松本と井上を帰しといてよかったぜ…。

まず思ったのは、その事。

最悪の事態を、何とか免れる。

特に、井上が削られたら現世に居る時には相当痛いからな…。
気配が消えたのをよく確認して、声を出した。

「…黒崎」

黒崎のほうに視線を向ける。

多少困惑しながらも、一応戦闘体勢をとっているのを見て、「いけるか？」と聞く。

黒崎は「ああ」と短く頷くと、制服の胸ポケットから義魂丸を取り出して飲み込んだ。

俺も義魂丸を飲み込む。

「…どこに行きやがった…？」

俺は視線を空中に向ける。

黒崎もそれに習ったように視線を上に向けて、斬魂刀に手をかけた。

「冬獅郎…さっきのヤツが、俺を狙ってるやつか？」

「恐らく、な。まあ、今の行動からして、そうと見て間違いは無いだろうな」

「そうかよ…」

そう言ったかと思うと、黒崎は地面を蹴って空中へと足を下ろした。
俺もそれに続く。

氷輪丸を片手に持って、黒崎の斜め前に足を止めた。

——あいつは…。

さっきまであんなに感じていた霊圧が、今は塵ほどにも感じられな

い。

逃げ足が速いのか、それとも、霊圧を消してここの周囲に潜んでいるのか…。

…前者は考えられねえか…。

自分で考えた事なのに、自分で毒づく。

「…とにかく…どこにいるかも分からねえんじや先制のしようがねえな…」

俺がそう言うと、黒崎が俺の隣にスツと来て、質問をした。

「アイツは俺の事狙ってんだろ？」

どこと無く、口角が上がっているように見えるのは俺だけだろうか。

…いや、確実に上がっている。

十一番隊行き、大決定だな。

俺は少しため息をつく。

「ああ…確証はねえけど」

俺が黒崎を見上げてそう言ったときには、黒崎の斬魂刀・斬月は黒崎の身体の前に出されていて、刀を持っている右腕には左手がかけられている。

この格好は…。

——…まさか、な…。

そう思った瞬間、俺の隣で聞きなれた掛け声が俺の耳へと突き刺さった。

「卍解っ！」

そのまさか、だった。

なんて言うか…よく言えば決断力がある。
悪く言えば…

「…短気すぎるんだよ…てめえは…」

「漆黒」という条件

「おい！黒崎！」

勝手に飛び出して行った黒崎を呼び止めるように叫んだ。だが、一度スイッチの入ったあいつは、中々止まらない。

「ったく…」

俺は飛び出して行った黒崎の後について行く。

だが、とっくに漆黒になっていた空に紛れた黒崎は、なかなか見つからない。

こんな状況でどう闘おうとしてるんだか。

アイツは何も考えずに突っ込む癖がある。

…そこが無ければ、俺の隊に呼び込みてえんだけど。

「っ！」

サッと後ろに気配を感じて、身を翻した。

チリッと頬に鈍い痛みが走るが、そんなことに構ってなんかいられない。

俺はそいつと向き合った。

暗くて顔なんか分かったもんじゃないが、霊圧の感じで、分かる。

——アイツだ。

「お前、生きててくれたんだ。こっちとしては嬉しいよ」

「…不意打ちしときながら何言ってやがる」

呑気に話してくる相手だが、確実に殺気がこもっている事が分かる。

その殺気は気を抜いたらそのまま俺を刺し殺すんじゃないか、っていうくらいに研ぎ澄まされていた。

更木以上に戦いが好きそうな…いや、『殺し』が好きそうな奴だ。俺は、頬から流れてきた血を片手の甲で拭いた。

「さっきの…黒崎、だっけ？アイツは？」

「知るか。てめえを追ってどっか行っちゃったよ」

「じゃ、ここに居れば来てくれるかな？」

…恐らく、来ないだろうな。

アイツの霊圧探査能力は異常だから、な。

…それより。

「てめえは何者だ…？」

「あれえ？言ってなかったっけ？」

少しの間があって、アイツが口を仕方なさそうに開いた。

刀が、鞘に戻された。

「ギラ、とでも言っとくか」

「…ギラ？てめえの名前なのか？」

「コードネーム、ってやつ？本名はもったかっこいいぜ？」

なんなんだ？…コードネームがあるってことは組織、ってことか…？

そもそも、何で死神を狙ってるんだ？

聞きたいことは山ほどあるが、まず最初に聞かなきゃなんねえことは…。

「…てめえが死神を狙っている理由は？」

俺がそう言った瞬間、風の音が鳴った。

俺は反射的に刀を身体の前に出す。同時に、刀が交わる、やけに鈍い音。

その音を聞いて、思う。

——コイツ：刀じゃねえ：ッ！

一気に後ろに飛び退いて、距離をとった。

「へー、不意打ちでやられたわりには反応良いんだね」

「……」

アイツの武器：ヌンチャク型、か。厄介だぜ。

両刃となると：接近戦は分が悪いな。その上、この暗闇だ。目で追える自信も今はねえからな…。

「だとしたら：」

俺は瞬歩で上空へ上がる。そして、

「霜天に坐せ：氷輪丸！」

接近戦がダメなら：これしかねえ…。

黒崎が居れば相当の痛手を与える事が出来るんだが…。まだ来ねえのか：！ 一体どこを彷徨ってやがる：！

「まだまだ、だね。悲しいなあ」

「———！」

後ろに、莫大な量の霊圧を感じた。横から、刃が飛んでくる。

俺は、それをギリギリまで避けるつもりは無かった。

ギリギリまで、コイツを引きつけとかねえと：コイツの気を、俺に

向けとかねえと…アレが…当たらない。
腕に、刃が深く食い込んだ瞬間。

「月牙天衝！」

その声を合図に、俺は腕から刃を引き抜いてその場から一気に黒崎のほうへ走りぬける。

馬鹿でかい爆発音が俺の耳に飛び込んできた。

俺の羽織はその爆風で流される。

「遅えよ…」

コイツが来てなかったら、確実に片腕が飛んでた…。

鈍い痛みが走る左腕を、右手で強く圧迫した。だが、血が止まる気配は無い。

この暗闇じゃ、どれだけ血が出てるか確認できねえな…。

黒崎も、俺が怪我してる事には気付いてないだろ。

…そっちの方が、変な気を使わなくて済むから楽っちゃあ楽だが。

「悪い…。冬獅郎の霊圧感じるまで、全然見つかんなくてよ…」

…俺が始解してなかったら絶対にここに来てねえな…。…松本連れてきといた方が良かったかもしれない…。

俺はそう思いながら、ギラの居たほうへ、視線を向けた。

もうもうとした煙の中に、人の形があった。

明かされた正体

「しぶとい野郎だな…。まだ生きてんのか」

黒崎が吐き捨てるように言った。

荒い息遣いが聞こえる。それは煙の中から聞こえるっていうのは確かだ、未だ逃げていない…。そういう証明にもなっていた。

黒崎は煙がさつきより薄くなったのを見て、近くまで近づいて行く。俺は、その数メートル後ろを、付いて行った。

「はっ…こんなもんかよ…」

息が切れているなか、やっと聞こえた言葉は、それだった。

黒崎の眉が、ピクリと上にあがる。月明かりが少し差し込んできた。それと同時に、何事も無かったかのように煙は風に流され、ギラの姿があわらとなる。

「その小さい隊長さんが俺の攻撃を避けなかったのはこれを実に当てるため、か…」

俺とギラの視線がぶつかる。そしてすぐ、その視線は俺の左腕へと動いた。

小さく舌打ちをして、「飛んでなかったのか…」と独り言のように、でもその割には大きな声で言った。

「てめえは…何のために俺を狙ったんだ？」

黒崎が口を開いた。

ギラの血が、下へと滴り落ちて行く。俺はその落ちて行く一粒一粒

を目で少し追いながらその質問の答えを待った。

「何のため？…理由なんか知るかよ」

血の色が混じった唾を吐いて、ギラは言う。

俺と黒崎はその言葉の続きを待っていた。

「上からそう言われたただけだ。楽しそうだったし、引き受けたんだけどよ…」

フツと、視線が柔らかくなって、黒崎のほうを見つめた。

黒崎は少し驚いたようにギラを見ていた。

「こんなに強かったなんてな…。マジで予想外だぜ…」

少しの安堵と、少しの悔しさが混じったような、複雑な言葉がするりとギラの口からこぼれだす。

殺気も、先程よりかなり落ち着いてきている。

——今なら、いける…。

出来るだけ、情報を集めておくか…。

下手すればまた襲い掛かってくるかもしれない。それまでに、出来る限りの情報を集めとかねえと…。

自分がこんな状況でも仕事のことを考えてしまうのは、いわゆる職業病、とかいうやつだろうか。

左腕も痛みを我慢しながら、俺はギラに話しかける。

「なあ、ギラ。お前…誰に命令されたんだ？」

出来るだけ、自然に。相手が嫌がるようなら無駄な詮索はしない。ただ、俺の場合そんな甘ったるいことを言ってられる状況じゃねえ

んだけど…自分の事はとりあえず後回しだ。いまはこの情報収集に神経を集中させねえとな…。

「誰って…上の奴に決まってるだろ…。それ以外に…誰がいるかよ…。」

さっきより息が荒くなっているのがよく分かる。

肩がさっきよりもずっと大きく動いていて、足元がややふらついている。

——月牙天衝をモロでくらって生きてるだけでも充分凄いで…。ヌンチャクが粉々になっている事からヌンチャクで受け止めたんだろうけど…それにしてもあの霊圧の塊をよく止められたもんだな…。

「上の奴…？そいつの名前は？」

俺が色々と考えている間に、黒崎が質問をしていた。

ギラは少し咳払いしてから、言った。

「そいつの名前は——」

そこで、ギラの言葉は止まった。

この一瞬、何が起きたか理解は到底出来なかっただろう。分かったのは、ただ一つ。

俺の目の前をもの凄い風が通り抜けた。

それだけだった。

そして次に理解した事。

ギラの首が飛んでいて、ギラの身体が俺の方に倒れ込んできていた事。

生暖かい血が、俺の方に飛んできて、やっとその事に気が付いた。

「ぎ…ギラ？」

とりあえず、とかっていう言い方はおかしいかもしれないが、俺はギラの名前を呼んだ。

返って来るはずも無いのに、俺は珍しく幼い声で、数回、その名を身体に向かって叫んでいた。

左腕がこの状況じゃあ、身体を支えるのは到底不可能な事くらい、自分でも分かった。

でも、それでもこの身体をこのまま下に落すのはあまりにも酷くないか。そんな考えが過ぎって、俺は自分の肩でギラを支える形になっていた。

黒崎が、条件反射のようにこっちに跳んできて、ギラの身体を両腕で支える。

「黒崎…」

「何が起こったんだよ…っ！くそっ！！」

これだけの血の量にもびくともせず、黒崎は身体を担ぎ上げて、近場の建物までギラを運んで行った。

静かに下ろして、首の無くなったギラを、改めて直視する。都合よく頭がこの辺に転がっているわけもなく、恐らく下に落ちてしまっただろう。

「はあ、危ない危ないっ」と

俯いていた顔が、一気に上がった。

その、声がした方向に。

三人の人影が、そこにはあった。その三人に、俺はなんとなく見覚えがあるってことに、俺は途中まで気付けなかった。

「まったく：ギラは口が軽いんだよ。だから止めろつつたのに」

「えへへー。まあいいんじゃないの？ 丁度始末できたし」

「そうですよ。敵に傷を負わせることも出来ましたし、一石二鳥つてやつじゃないですか？」

僅かに見えた金髪で、理解した。

あいつ———。

「おい！ てめえ———まさか…」

俺はそこで言葉を止めた。黒崎が不思議そうにこっちに視線を送っているのが分かる。

この事は…今すぐにでも、総隊長に伝えなきゃならねえ…。

「まさか…脱獄、しやがった奴…じゃねえよな…？」

「あれれー？ そこに居るのは十番隊隊長の日番谷冬獅郎さんじゃないですかあ♪どうしたんです？ こんな所にいるなんてめずらしいですねっ！」

金髪が、街のネオンに照らされて光っている。

明るく気さくに話すあいつは…確か———。

「元・三番隊第三席の花原^{かはら}…だよな…？」

「あっ♪あたしのこと、覚えててくれたんですね！ 光栄です！」

てめーみたいな奴、覚えてなんかねーよ。つーか話した事もあったこともねーだろーが。

俺は瞬時に心の中でそう思った。

脱獄者が出たから、そいつの顔と名前を覚えときゃなんかの役に立つと思ったから覚えてただけだ。

…いや…待て。あのメンバー全員…かなりの重罪を犯してきた奴ばかりじゃねーか…。

また会う日まで

今の空気に似合わない、素っ頓狂な声が聞こえた。

「冬獅郎、知り合いか？」

「ふざけんな。あんな奴らと知り合いになんかなった覚えはねえな」

俺の視線は、花原にずっと向けられていた。黒崎も、その事を察したからそう聞いてきたんだろう。

俺は足元にあったギラの死体にスッと視線を向けて、ためらうように、口を開いた。

「舞桜^{まお}…。花原、舞桜。それがあいつの名前だ」

「花原…舞桜…」

黒崎が復唱する。その声がしてから、俺は声のトーンを少し低くして話し始めた。

「元・三番隊第三席だったやつだ。アイツ…他隊の隊士を三人殺したから、牢にぶち込まれてたんだ」

「何で殺したんだよ」

間髪居れずに、質問の嵐だ。

正直、こんな問答しているより止血をしてあいつらを捕らえたいところなんだが、あいつらは一向に逃げる気配が無いから大丈夫だろう。

俺は質問に答えた。

「知るかよ。ただ…その隊士達はいつの「ストレス解消」の道具

として殺された。…それだけだ」

黒崎の顔が曇る。俺も、つい視線を下に向けた。

「許せねえ…」

「…」

低く唸るような声が聞こえて、黒崎の霊圧がグン、と上がったのが分かった。

俺は少し身をかがめて、黒崎を見つめる。

「おおよ？ 日番谷隊長のお隣に居る死神さん…誰？ 知らない人なんだけど」

「あれだ、あれ。藍染隊長とやりあったやつ」

「ああ、ボロ負けだった人ですね」

花原と…誰だ？ くそ…視界がぼやけて来やがった…っ！

俺は腕に自分の肩掛けを適当に巻きつけて、適当な止血を仕上げる。黒崎の霊圧はさっきよりも上がってる。止めないと永遠に上がり続けるんじゃない勢いだ。

「待て。ここは一旦退いて対策を練った方が…」

「そんなこと…言ってられっかよ…」

…まずい。

瞬時にそう判断した。

今、コイツがあいつらに飛び掛ったところで…確実に殺されるだけだ…。これ以上、こっちが手傷を負うわけにもいかねえ…。

「黒崎！」

珍しく声を張り上げ、黒崎をこっちに振り向かせる。

「何だよ、冬獅…っ！」

向いた瞬間に瞬歩で懷に忍び込み、鳩尾みぞおちに一発、肘を入れる。

だが、今の俺の状況で黒崎を抱える事は不可能だ。意識を失った黒崎をゆっくり、肩と右腕を使って地面に横たわらせ、俺は花原達に向き直った。

「お前ら…仲間じゃなかったのか？…こいつと」

俺はギラの死体に目を向けてそう言う。

花原が小さく笑って、

「仲間？違うよ。それは私の玩具！言う事聞かなかったから、お仕置きしてあげただけ」

「…玩具…だと…？」

俺の視界には、もはや花原しか映っていない。

「どうしたんです？その眼。私と殺り合おうとでも？止めといった方がいいですよ。私、強い人にしか興味が無いんです」

「…やっぱり…てめえらが現世に来てた死神を殺してたんだな…」

刀を、片手で構えた。

それを見た花原が、鼻で笑う。

「話、聞いてました？強い人にしか興味ないんです、私。今の隊長じゃ、三秒もかかんないうちに殺せちゃうもん」

——分かってる。

あいつが無意識に垂れ流してる霊圧は、既に副隊長レベルを超えている。今の俺がかかっても、持たせる事が出来る時間は…長くて、数分。

一瞬でも気を抜けば…あいつの言うとおりに、数秒で首を飛ばされるだろうな。

「——霜天に坐せ——…」

ゆっくり、息を吸ってからそう言った。

花原は、少し中腰になっている。戦闘態勢、だろう。

俺が、斬魂刀の名を言おうとした時。風が俺の隣を過ぎ去り、首筋に冷たいものが当たった。

「ほら、初動が遅いんですよ。こんなんじゃ瞬殺出来ちゃいます」
「…！」

俺の後ろに花原が居て、刃が俺の首筋に鋭く触れていた。このまま押せば、俺の首は簡単に飛んで行く。
そんなことが容易に想像できる程だった。

「でも、隊長は特別です。見逃しますよ」

「…なんだと？」

「私、万全の準備が調った隊長と、一度手合わせしてみたかったです」

そう言って、ふわりと宙に浮かぶ。

「待て！」

そう言ってみるものの、腕の痛みがさっきよりずっとひどくなっていて、俺の肩膝の力が一気に抜けた。

「それじゃ、また会う日まで」

手を振って、そう言った花原の姿は、次の瞬間、もうどこにも見当たらなかった。

ごめんな

「あ！おい、待てよ！」

「全く：ああいう性格は困りますね、自己中で」

残された二人は何かをぶつぶつ言いながら、俺達のほうを見る。

「うちのリーダーが迷惑かけたなー！悪い悪い！また今度、お前が生きてれば会おうぜ！」

「ケンカ売ってるみたいですよ、それ」

二人は軽く空中を蹴って、そのまま俺の視界からあっという間に消えてしまった。

「…」

俺の身体は、奴らを追いかけるために、無意識に数歩、動いていた。そして、ハッと身体を止める。

——違う——…。

俺が今やるべき事は、あいつらを追いかけることじゃない。

負傷者の応急処置、そして——状況把握と状況連絡：…だろーが！何やってんだ、俺は…。

俺はゆっくりと息を吐く。風が斜め後ろ辺りからゆっくりと吹いてきて、髪がゆっくりと揺れた。

頭をフル回転させる。

——あいつらは一体なんなのか…。

あいつらについて分かった事といやあ：あいつらが元・死神で、少なくともどっかの隊に所属していたという事、くらいか？それから…倒すのは強い奴だけで…それから…。

くそっ…頭が働かねえ…！

「そうだ…ギラをどうにかしねえと…それから黒崎も家まで運んでやらねえとな。強くやりすぎたか…。…総隊長にも連絡しねえと…」

物事の整理が付かなくて、次から次へとやらなければならない事が流れ込んできて、優先順位が付けられなくなってくる。

ゆっくりと息を吐いて、気持ちを落ち着かせる。

「落ち着け…。まずは…総隊長に連絡、だな…」

伝令神機を懷から取り出して、血の気が少なくなって痺れてきた指をゆっくりと動かしながら、ダイヤルボタンを押した。

「ああ…十番隊隊長・日番谷冬獅郎だ。総隊長に代わってくれ――」

さっき足りない頭で考え、整理したことを総隊長に伝える。

そして、俺が最終的に出した答えと考えも合わせて。

総隊長から答えと考えについて渋々許可を貰い、会話を終わらせた。

「次は…」

ギラ…はどうするか…。

飛んだ首を捜して、せめて墓だけでも作ってやりてえしな…。

敵に情けをかける気はねえが…俺のせいで殺されたようなもんだし。

俺は自分の怪我の事も忘れて街の方へと飛び降りて行った。

「この辺だった気が…」

暗くてよく見えなかったが、この辺だった事は確かだ。
俺は辺りを見回して、ギラの首を捜す。

意外にも、街の光で手元が見えるくらいには明るかった。

——この調子なら見つかるかもな。

ごく僅かだが、希望の光、見たいなモノが見えてくる。

「あ…」

…あった。

首だけだと…やっぱり少し足がすくむな…。

地面に乱暴に落ちていた首を、片手で拾い上げる。腕に抱え込んで、元居た場所へ跳んで行く。

「黒崎…」

戻ると、黒崎が起き上がっていた。

正直、あんな弱く入れた肘でこんな長時間気絶しているとは思わなかった。

「てめ…いきなり何しやがんだ！」

「うるせえな。病み上がりは安静にしてろ」

「俺に怪我させたのはどこのどいつだ！」

黒崎がぎゃーぎゃー騒いでいる間に、ギラの首を身体の所に持って行った。

首を合わせ、その場に膝を付いた。

「黒崎」

「あ？」

俺が名前を呼ぶと、少しイラ付いたように返事を返した。
多分、話を無視してたのにイラ付いたんだろう。
そんなことは気にしないで、俺は話を続けた。

「お前の身体なら、コイツを運んでいけるか？」

「はあ？ お前でも運べんだろ」

「…運べねえから頼んでんだよ」

「はあ？」というように黒崎の表情が変わる。その後、視線が俺の腕に動き、そこで初めて俺の怪我に気付く。

「お前…いつ…」

「いつだっていいだろ…。とにかく運んでくれ。…そうだな、その空き地まで、頼む」

俺が視線を向けた先にある空き地は、すっかり寂れていて、人通りが滅多になさそうな所だった。

「…分かったよ」

渋々頷いて、黒崎はギラの身体を背中に抱え、片手に首を持った。そして、地面を蹴る。一瞬で俺が言った空き地までに行ってしまった。

俺も、一步踏み出してからその後が続く。

「少し退いてろ」

黒崎を後ろに下がらせ、掌を地面に向けた。

「蒼火墜」

蒼い炎が、俺の掌から地面へと走って行く。あっという間に、一人入れる位の穴が開いた。

「入れてやってくれないか？」

「…あ、ああ…」

黒崎がゆっくりとギラの身体を穴の中に入れて、ギラの身体がすっぽりに入る。頭が入ってから、俺は周囲の飛び散った砂を集めた。その砂を穴に入れていって、ギラを埋めていった。黒崎もそれを手伝う。

埋め終わった後、俺達は軽く、墓前に手を合わせた。

「ごめんな…俺のせいで」

小さくそう呟いて、黒崎を引き連れ踵を返した。

ごめんな(後書き)

話の展開無くてスイマセン(^^;;
それから、更新も遅くなりました。

少し今年は更新が遅くなりそうなので進行が遅いかもかもしれませんが、
そこらへんはご了承下さい。

共同戦線

——黒崎家。

俺は、ほとんど一方的にここに連れてこられた。

「つてて…。自分で出来るからもう止めろ…」

「あのなあ、手荒でもいいつつたのはお前だろ！文句言うなよ」

「手荒で良いなんて言った覚えはねえ。それから文句は言っただけで、苦情を言っただけで。それに、俺は自分でやるつつてんだ。やらせろ」

自分でも、珍しく話してるな、とは思った。

黒崎の顔が一瞬固まり、吐き捨てるように黒崎の部屋に声が響いた。

「つつとに可愛げのねえ奴…」

「無くて結構だ。お前のところのものさしで俺の年齢を測るな。こう見えても俺はお前の五倍は生きてる」

他愛の無い会話のようなものを交わしながら、消毒液と白い包帯は俺と黒崎の間を行き来していた。

最終的には俺が消毒液と包帯を強引に奪い取り、事は終わった。

死覇装の左腕を捲くり、包帯を巻いていく。小さい頃から小さい怪我でも雛森に包帯を巻いていたから、その辺は手馴れている。

「手馴れてるな」

「まあな」

包帯の端を口にくわえて、きつさを調整する。

黒崎が椅子に腰をかけたはずみに、ぎい…と音が鳴った。そして、

ため息の音。

「悪かったな」

「何がだよ」

俺もため息をついた。

包帯を縛り終わり、その場に足を立てた。氷輪丸をベッドに立てかける。

「俺がしっかりしてればお前はこんな怪我しなかったのにな」

「けど、俺が怪我しなかったらギラから情報聞き出せてなかったからな。こんなもん、その代償にすぎねえよ」

腕に巻かれた包帯に血が滲んで行くのを見ながら、俺は言った。

白が赤に移り変わって行く。

「結果、お前も俺もギラに同情して相手を逃がしちまったけどな」

「逃がしたくて逃がしたわけじゃねえ」

「あ？」

黒崎の瞳が、ひた、と俺を捕らえた。

俺は、その瞳をキッと捕らえ返す。黒崎の瞳に力がこめられていた。

「泳がせてるんだ。それに、上に報告もしなきゃならなかったからな」

「上に報告…？って事は増援が…」

「来ねえよ」

俺の言葉に、黒崎の周囲に？マークが浮かんだ。
そして。

「はあっ!!?」

叫び声。

まあ、無理も無いが。

「来ないって…冬獅郎…っ、お、お前…この状況分かってんのか!」

「分かっているに決まってるだろ。だから、増援を呼んでない」

「意味分かんねえ…」とかなんとかぐちぐち言いながら、黒崎はまた椅子が音が鳴るくらいに腰をかけた。

黒崎の目は、窓の外へ向かう。

「…これ以上、犠牲を増やすわけにはいかねえ…。犠牲になるなら、隊長一人で充分だ」

「はあん…乱菊さんも犠牲にはしないわけか」

「当たり前だろ。うちの隊の大事な副官だ。殺させねえよ」

グッと、拳に力をこめる。

黒崎は俺の方に少し視線を向けて、またすぐに逸らした。

「お前らしいっちゃあお前らしいな。けど…」

「今回狙われているのはお前だからな。どうせ、俺を一人で戦わせてはくれねえんだろ」

腕を組んで、視線を向ける。

黒崎は少し苦笑して「言おうと思ってた事言うなよ」と少し不快そうに、でもどこか楽しそうにそう言って机に肘をついた。

「怪我は井上に見せるからな。今度は逃げるなよ」

「…うるせーよ」

俺は少し顔を背けながら、バツが悪そうに言葉を吐いた。

黒崎はそれに笑って、椅子を俺の方に回転させた。やがて、真面目な顔になって腕を組む。

「…で、どうすんだ？」

「どうもこうもねえよ。とにかく、これ以上犠牲を出させねえ。それだけだ」

「…分かったよ」

顔に小さな笑みを浮かべて、俺の意見に承諾した。

共同戦線…といくか。

釣りの餌

「双天帰盾っ！」

井上の黄色い声で、目が覚めた。

視界に入ったのは、井上の栗色と、オレンジと…蜂蜜色。どう考え
ても残りは黒崎と松本だ。

急に電球の光が目にし込んできて、俺は目を細めた。

「あ、隊長、起きました？」

「ああ…」

松本の声と同時に、上半身だけを起こす。

どうやら、俺は黒崎ん家のベッドを占領して眠ってしまったようだ。

「冬獅郎くん、ごめんね、起こしちゃった？」

井上がそう言って、腰を少しかがめた。

「いや…大丈夫だ。気にしなくて良い」

俺はそう言って、黒崎の元に視線を向ける。そして、すぐに松本に
も視線を送った。

腕の傷が徐々に治っていくのを感じながら、俺は口を開く。

「…黒崎、お前はこれからも普段通り、学校に通ってくれ」

「え？ いや、でも…」

素っ頓狂な声が、俺の鼓膜を揺すった。

井上の視線が、不思議そうに俺達の間を行き来している。
俺は黒崎が何か言い出す前に、

「いいから…聞け」

といつも視線より少しきつめに送る。

黒崎は力が少し抜けたように「あ、ああ…」と返事を返した。

——…これ以上の犠牲は避けたい…。…てことは、だ。

井上にこれ以上この話を聞かせるのはまずいか…？

それとも、全ての事を話して最前線での治療を頼んだ方が良いか…？
いや…それはよした方が良いか。

もし井上に何かあったら困るからな…。

「冬獅郎くん？あたしがどうかしたの？」

「へ？」

やけに子供のような声を出していて、いつの間にか口元に持っていて、
かかっていた人差し指が、ぴくっと動く。

「何か言ってたか、俺？」

俺がそう言うと、間髪居れずに小さな笑い声が聞こえた。

「隊長、何かぶつぶつ言っていましたよ。いつもみたいに」

少し小ばかにしたような言い方で、松本が言う。

——…やべ。

癖が出ちゃったか。

大体そうだ。周りの音が聞こえなくなるくらい物を考えると、その
物事を整理したくなるのか、口に出す癖がある。

いい加減直らねえかな…。

…と。

今はこんな事はどうでもいいじゃねえか…。

自分の心境を仕切りなおすように、死覇装の襟を正した。

「…井上」

「はいい!？」

突然名前を呼ばれて驚いたのか、大きな声で返事が返ってきた。

「ど…どうしたの? 冬獅郎くん」

「あとどの程度で治療は終わる?」

俺の素っ気無い質問に、井上は少し考えて、

「うーん…五分くらいかな?」

と掌を広げて、俺に言った。

俺は「そうか…」と言った後に窓に視線を向けた。

鳥のさえずりが聞こえて、太陽の光が白い雲から差し込んでくる。

「のどかだな…」

俺は嫌味半分でそう呟いた。

「隊長、嫌味ですか? それ」

「うるせえよ」

松本が笑みを浮かべて言ってくるのを、スパッと斬って落とす。

「隊長ひどい!」と、いつものようにピーピー騒ぐ松本を尻目に、

俺は黒崎に目を向けた。

「いいか、普段通りに生活しろ。お前は何も心配しなくていいし、神経も尖らせるな」

俺のこの要求に、黒崎は「ふざけんな」と言わんばかりの目をした。そして、怒号が飛んでくる。

「てめえ、結局自分で何もかんもやろうとしてんじゃねえか！納得いかねえ！！」

いつの間にか治療が終わっていた腕に手を伸ばして、抱え込むように左腕をさすった。

巻いていた包帯を取り、所々に真っ赤な染みがあるそれを懷にしまひ込む。

「ありがとな」と、井上に小さく礼を言って、松本に井上と家に帰るように言いつけた。

松本たちの霊圧が小さくなっていった頃、俺はようやく口を開いた。

「…納得がいなくてもいい。お前が普段通りに動いてくれないと色々と困るんだよ」

「ああ？どういう意味だよ？」

氷輪丸に少し目を向けて、それから、独り言のように呟いた。

「作戦が練りやすいんだよ。そっちの方が」

いわゆる、黒崎は釣りで言う「餌」に当たる。

黒崎で奴らを釣り、仕留める。
下手すりゃ黒崎は無事で済まないだろうし、俺だって死ぬ可能性がある。
ある。

ただ、この方法が奴らをおびき出すのがより簡単で、簡潔だ。
その事を分かりやすく黒崎に説明していたら、いつの間にか太陽は一番高い所まで上っていた。

「俺、餌かよ」

少し嫌そうに呟いたとたん、口角がにやりと上がる。

「いいぜ、なってやるよ。けど」

黒崎はそこまで言って、言葉を止めた。

次に、堂々と俺に指を指して、

「あいつらが現れたら、俺は遠慮せずに死神化する。文句は言わせねえ。お前だけにやらせねえからな」

そう言った。

俺は少しその言葉に笑い、「ああ」と返事を返した。

この事を、井上の家に帰ってから井上に聞かれないように松本に説明するのはかなりの骨だった。

花原の前科

やけに耳に響くチャイムの音に耳を傾けながら、屋上に俺は立っていた。無論、松本も居る。

「隊長、一人でムチャはしないで下さいね」

「…俺がムチャしなきゃ、誰がこの仕事片付けんだよ」

「…隊長らしいのかなんというか…」

松本が苦笑したのが分かった。俺はその苦笑の意味が分からず、「なんだよ」と聞き返す。だが、松本は「いえ、別に」と言っ、答えてはくれなかった。

——あいつらは…何故強さにこだわるんだ…？

考えれば考えるだけ、その謎は深まって行く。ただ単に闘い好きという風には見えなかった。

そんなことを考えていると、不意に伝令神機が鳴り響いた。

少し驚いて、懷からそれを取り出した。

「…はい」

「あ、日番谷隊長かい？」

「…浮竹…隊長、っすか」

思わず、普段のように呼び捨てしてしまいそうになる。仕事の際は「隊長」をつけるように心掛けている。公私と私事を混同させないようにする為の、一種の手段だ。

「…過去の犯罪者記録…調べてみたんだが…」

「…総隊長…嘘つきやがって…」

「ん？ 何か言ったかい？」

「いや、別に…」

総隊長は、確かに「誰も関わらせない」と言っていたはずだ。犠牲が増える可能性があるから、誰も関わらせないでくれ…。そう言っただけなのに。

——たまには俺の言う事を率先させてくれよ…。
これ以上、隊長が減ったらこまるだろうが…。

「花原舞桜…。かなりの重罪だ」

「…罪名は？」

「同僚殺し…。それも、ちょっとどころじゃない」

浮竹の声のトーンが、少し下がった。

「…その人数は…？」

正直、聞くのが怖かった。とんでもない数を聞きそうで。

「…約、百二十人という記録が残っている。五十年前の出来事だ」

「ほぼ…丸々一隊分の人数くらいって事か…」

一隊全滅させたって…と…終身刑でいいところか。だが、あいつが生きてるところから見ると…終身刑だったんだろうな、きっと。中央四十六室の裁定を、もう少し厳しくするよう頼んでみるか。そんな考えを冷静に導いている時だった。

「日番谷隊長：君は、会ったんだね？花原舞桜に」

「…ああ。本人もその名で反応したから、間違いはねえと思う」

目を閉じて、昨日のことを思い出していた。

やけに鮮明に覚えていたのは、ギラの頭が飛んでいったことと、自分の腕の痛み。無意識に左腕を見ていた。傷は完治しているのに、やけに鈍い痛みが走った。

「外見は？配られた資料と同じだったのかい？」

「…ああ。ほとんど同じだったな。それから――」

それから、で言葉を止める。浮竹が不思議そうに「それから、何だい？」と聞いてくるのが、一瞬ただのノイズにしか聞こえなかった。

「…い、いや、何でもねえ…。気にすんな」

それから、まだ仲間が居た。そんなこと、口が裂けても言えるわけが無え。そうなったら援軍なんだで犠牲が増える可能性がある。それだけは…ごめんだ。

「それじゃ、ありがとな、浮竹」

そう言って、一方的に電話を切る。松本が「どうしたんですか、隊長？」と興味深そうに聞いてくる。

「ああ…。例の奴らのリーダーがな、一隊分の同僚殺しをしたっていう話題だ。結構な収穫になったな」

俺が言うと、松本は少し間を置いて、何かを察したように、口を開く。

「…まさか、犠牲を増やさないように貴重な情報とかをあっちに言っていないとか…ありませんよね？」

「…」

凶星だ。ったく…。こいつはいらねえところで察しがいい。これをどうにか仕事に活かせねえもんか…。

俺はいつもみたいに顔色を変えないで「ねえよ」と松本の顔を見ないで呟く。

「本当ですか？あたしの目、見て言えます？」

こいつは…何なんだ…。

何でもかんでも見抜かれてるようなこの気持ちの悪い気分は…。ここは白状するしかねえな…。

俺が口を開こうとした時、例の霊圧を察知した。

松本の蜂道色のロングヘアーが揺れて、風が流れた。

考え事の有無

「伏せろ、松本っ！」

俺の事言葉が無かったら、確実に危なかった事だけは分かった。
俺は松本の傍に駆け寄り、義魂丸を飲み込む。松本も立ち上がって、
義魂丸を口にした。

「…まったく：懲りずに黒崎を狙うか。いい加減諦めろってんだ」
「ええ？何ですか？」

このぴりぴりした空気にやけにノンビリした奴の口調はかなり不釣
合いだ。松本と俺は無意識に刀の柄に手を伸ばしていた。
そして、声のする方向：上空三十メートルといったところだろうか。
そっちに目を向けた。

「花原。てめえの事は調べたぜ」
「へえ。あたしに興味でもわいたんですか？」
「てめえなんかにわく訳ねえだろ」

そう言って、刀を引き抜いた。花原の姿がちらりと雲の隙間から見
えて、一瞬、目が合った。次の瞬間、風の音。

「そう何度も：同じ手食うわけねえだろ」
「えへへ。やっぱりそうだね。さっすが日番谷隊長♪」

ギリギリと刃の交わる音が俺の鼓膜を逆なでして、背中が凍り付く
ような感覚が走る。それと同時に俺は松本に視線だけ向けた。松本
がこくんと頷くと、スツとその場から居なくなる。

「あれ、どうしたんですか？ 仲間割れじゃあるまいし」

「うるせえぞ。長年の付き合いだ、以心伝心、ってやつだよ。それよりも…」

思いつきり刀を弾くと、次の斬撃を加える。

「喋ってると…舌噛むぜ？」

「余計な心配ありがとうございます。でも、自分の心配をしたほうが良いんじゃないですか？」

スッと花原の片手が俺のがんぜんに来た。そして

「破道の三十一…」

「遅え」

術の発動と同時に、俺は氷輪丸に霊圧をこめてその炎を消滅させる。花原の視線が詰まらなさそうに俺に向き、刀がまるで別の生き物のように動き始めた。

何度も金属同士がぶつかり合う音が空中に響く。さっきとはまるで別人だ。剣さばきも、癖も、何もかもが。

「気に食わねえか？」

「何がですか」

その返答は、まるで死人から聞こえた言葉のようだった。気付けば、黒崎の居る高校から相当離れたところに居る。

「俺がそんなに気に食わねえかって聞いてんだ」

「そうですね。まさか鬼道が止められるとは思いませんでした」

さっきのちゃらついた言語とは正反対に、冷静沈着なその言葉は、やけに暗く、重苦しかった。俺は小さく「そうか…」と呟くと、刀が交わった瞬間に片手を離す。

「蒼火墜」

ドンッ、と俺の手から放たれた蒼い炎は、花原の顔面ギリギリを通り過ぎて、空中ではじけた。辺りに火薬のような匂いと爆風が立ち込める。

「鬼道放つなら…これ位の速度じゃねえとな」

片手をまた刀に戻すと、また斬撃の放ち合いが始まる。ふと気が付くと、花原の霊圧が上がっている。霊圧は心情によっても様々に変化するが…。

——何だ、この霊圧の感じは…？

普通、ここまでの霊圧の変化は無い。だとすればコイツは…。

「何考えてるんですか？」

「！」

キンッ、とやけに甲高い音を身体で感じて、ほう…と息を吐く。何だ…？ やけに速さが変わってるな…。それに、この重苦しくて濃い霊圧…。前にもどこかで感じた事もあるような気がするな…。確か、あれは——。

「考え事をしながら戦うモンじゃない」…。確かそんな事を、昔誰かに言われた気がするが、誰だか思い出せない。でも、その言葉の意味を今この瞬間、やっと理解できた。

「考え事なんて、仕事の時くらいにしておけ。戦いするときだけは戦いのことだけを考えろ」……。いつも考え事をしながら闘っていた俺は、このことに納得がいかなかった。

——戦いの事だけ……。確かに、そうだな。
その意味を、今自分の身を持って実感した。

以心伝心

「つとに…あぶねーな…」

頬の傷を手の甲で拭った。拭ったところでその血が止まるもんでもねえ。また心臓の鼓動と同時に血が溢れ出した。

——…そうか…更木、だったな。

更木が俺の戦い方を見てそう言ったんだ。「戦いのことだけを考えろ」とか何とか。

——「そうすりゃ、お前は化けるぜ」

化ける？　んなわけねえだろ。そんな考え事するかしないかだけの違いで…。

そう返してやったら、あいつは鼻で笑ってどっかに行っちゃった。

ホントによく分かんねえ奴だ。

俺はそんな遠い昔の事を思い出しながら、片手で刀を握り、中腰になる。そして、俺の頬から流れ出る血を見て不気味に微笑んでいる花原に、俺は話しかけた。

「あのな、てめえもいい加減こんな事やめろって。こんな事したって後に後悔の念が残るだけだぞ」

不意にこんな質問をされて驚いたのか、花原の目が一瞬見開かれたように見えた。だが、すぐにさっきの冷酷な目に戻る。

「後悔？　ふふ…後悔、ね…。知ってる？　日番谷隊長」

花原は俺の血が付いた自身の刀を愛しく見つめると、その血を何と

も不気味に舐めた。

その様子に、俺の足は一瞬だけすくむ。

「私に後悔の念なんて無いの。同僚殺しをした時だって、ただただ満足感しか残らなかったわ」

「…そうか」

俺は少し斜め下を向いた。花原は自分の言葉を止め、俺の方に視線を向けた。

「…残念だ」

俺が花原にそう言った瞬間、花原の身体に六杖光牢が放たれた。俺は身動きの取れなくなつた花原の傍に瞬歩で移動し、前に立つ。花原の瞳が、ゾンビのように俺を見上げていた。

「こんな手荒な事はしたくなかつたんだけどな。…やっぱり、自首なんかしてくれねえよな」

普通ここまで情けはかけないんだが、どうも「元死神」と分かつただけで同情心が沸いてしまう。まだまだ魂に平等に接し切れてない俺は、大人になりきれてないのだろうか。

「…そう…。だから副隊長さんが途中で居なくなったのね」

不気味に笑い、口元がにやりと上がった。前髪が乱雑に乱れ、その隙間から覗く目は「人殺し」の目だったのをやけに覚えている。

「日番谷隊長との話の区切りに丁度よく縛道だなんて…。やってくれますね、あの副隊長さん」

「言つたろ？ 『以心伝心』だ、って」

約百メートル離れているところにあった蜂蜜色のそれを、俺は見つめた。少し、頭を下げたように見え、そして「やりましたよ」とでも言うかのように優しく微笑んだ。その表情が、これだけの距離でも分かる程だった。

「うちの副隊長を舐めてもらっちゃ困るな」

「…」

反抗期の子供のように、その目はつり上がっていた。今すぐにも逃げ出したいのだろう。しかし、鬼道を自力で解く時の身体への負担、痛みを知っているのか、足搔いてはいなかった。

「それじゃ、てめえの仲間、全員の場所を吐いてもらおうか」

「仲間？ 私に仲間なんて居るわけ無いじゃない」

「ああ？ じゃあ昨日の奴らは何だ？」

これじゃあ尋問だ。あまりこんな事は好まない。

花原は目を俺から逸らして、松本の方を見やる。そして口角を少し上げ、不気味にこう言い放った。

「仲間じゃないわ。私の『僕』よ」

俺の視線は迷うことなく松本のほうに向かっていた。

冷や汗が、やけに感触が分かるほどゆっくりと首筋を伝っていた。

灰猫

「松本…っ！ てめえ…！」

俺は一度視線を離れた花原に、すぐに視線を戻した。

乱れた前髪からもう目は覗けず、口元だけが不気味に笑っている。

「ふふ…隊長、あなたさっき言ったわよね？ 『うちの副隊長を舐めるな』 って…。だったらこっちも言わせて貰うわ…。私の僕を甘く見ないで」

その言葉を最後まで聞き取ることなく、俺は松本の居た所まで瞬歩で駆け寄って行った。

既に松本が自身の斬魂刀を抜いているのを見ると、もうその「僕」とやらがこの場に到着しているのだろう。

「松本！」

「隊長、気をつけて下さい。奴ら…強さのレベルで言ったら副隊長レベルです」

少し息を切らしかけている松本を少し目で見やって、視線をフツと空中に向ける。

…やっぱり…昨日の二人か。霊圧で誰かを判断する。

「ああ、分かった」

大丈夫だ。数で言ったらこっちも相手も二人ずつ…。少なくとも遅れをとることは無いだろ。

それに…副隊長レベルなら何とかなる。松本は副隊長の中でも秀で

てる奴だし、俺は隊長だ。強さもなんとか上を行ってるだろう。

「花原を向こうに放置してある。さっさと片付けるぞ」

「はい！」

威勢の良い松本の声を合図に、俺は空中に飛び出す。フツと左右に感じる、二つの霊圧。

俺は刀を鞘にしまうと、両サイドに掌を向けた。そして、咄嗟に鬼道を放った。

「蒼火墜！」

見事に二つの的に当たる。

二兎追うものは一兎も得ず。そんな言葉、この戦場では全く意味を持たない。

宙を待った二人を、視界の内に捕らえ、それを考慮に入れて都合の良い縛道を探す。

「∴鎖条鎖縛」

シャツと鞭のように撓^{しな}らせて、飛ばす。

これで捕らえる事が出来たなら、どれだけの時間短縮が出来ただろう。

流石に、そこまでスムーズには行かないか。

∴ここまで手こずった仕事は何百年ぶりだろう。

犯人まで確定できてるってえのに、そいつを捕まえるのにどんだけ時間かかってんだ。

「∴ちっ∴。やっぱ、そこまで甘くは無えよな」

見事に逃げられた二人を逃さないように見つめて、俺は苦々しく呟く。

隣に居る松本は、刀を構えて、「そうですね」と同意した。

二人は一向にこっちに仕掛けてくる事は無く、周囲を走り回ってどう考えても「時間稼ぎ」をしているとしか考えられなかった。

――松本の鬼道が解けるのを待ってる、ってことだよな。

松本の鬼道がそうそう解けるはずが無い。けど……だからといってこいつらを延々と泳がせておくのも時間の無駄だ。

……攻めるしかない、な……

「松本。……灰猫を頼む。ここら一帯に、な」

「……隊長、しかしそれは……」

「大丈夫だ。……上に避難しとく」

松本の灰猫……。広範囲に攻撃できるのは良いんだが、敵味方に関係なく切り刻んじまうって辺りはどうかして灰猫の性格を直した方が良いと思う。

……ま、そのためにはまず松本の性格を変えねえとな。その点では、俺の責任もあるのか……？

とにかく、今はこの作戦しか上手い具合に敵をまとめていぶりだせない。

「俺は高みの見物と行くか……。上に、誘い出してくれ」

「……はい」

決心したように松本は返事をして、灰猫を構えた。

「唸れ、灰猫」

その声とともに、俺は上へと飛び退いた。

下を見下ろすと、既に足元は灰色になっていて、中の様子が上手く確認できなかった。

二人の声だろいうめき声が聞こえてくる。

「さて…」

俺は鞆に収めていた氷輪丸をゆっくりと引き抜いた。

肩にそれを置いて、瞳を閉じた。

強い風が吹いた丁度その時、俺は小さく呟いた。

「十番隊の力…身を持って学ぶんだな」

禍々しい靈圧

俺の足元が完全に灰色に染まったその時、俺の後方に気配がした。

「くっそ…なんだよ、これっ！ ウゼーなあっ！！」

「五月蠅いですよ。これくらいの誤算でぎゃーぎゃー騒がないで下さい」

この二人…性格が正反對みたいだな…。

言葉遣いが悪いほうの外見は…どう見ても力任せな戦い方をしそうな奴…黒崎みたいな奴か。

もう一人の方は今の会話からして、計算高そうな奴だ。

俺はそんなことを思いながら、瞬歩を繰り返して、奴等の背後に移動する。

「テメーらの一番の誤算は…」

俺はそう言いながら、氷輪丸に靈力をこめた。刀の先から冷気がこぼれ、氷の竜が出現する。

「十番隊おれらがこの事件の担当をしてたって事だ」

二人に向かって竜が向かい、凍てついた牙を突きつける。辺りの空気が俺の冷気で白くなっていく。

すっかり視界も悪くなった、丁度そのころ、斬魂刀に違和感を覚えた。

「……竜が…消えた…？」

いや…消された…！？ この感じは…熱で溶かされたか…。

「隊長さーん！ いきなり攻撃するってーのはいけねえことなんじやねーの？」

「…」

俺は斬魂刀に靈力を送るのをやめ、冷気を抑える。すると、一気に辺りの空気が元通りになっていって視界がはっきりしてくる。

「おっ！ 視界がはっきりしてきたぜ…。これで落ち着いて話せるってもんだ！」

「…話せる？ 何言ってやがんだ、てめえ？」

俺は身体の横に刀を構えた。

「話す暇なんて与える気はねえ」

「おーおー、怖いねえ、この隊長さんは…。これじゃあ時間稼ぎも出来ねエヤ」

「あんまり要らないことをべらべら喋らないで下さいよ」

…やっぱり時間稼ぎか…。考え無しに喋ってるのか…それとも何か考え合って喋ってるのか…。読めねえ野郎だな、あいつ…。けど…どうやらもう、逃げ回る気も無えみてえだな…。

「てめえらの頭は捕らえてる。自首するなら今のうちだ」

「そうですね…。確かに捕らえられてはいますが…そんな事、自首と関係はあるんですか？」

「…何？」

花原の傍には松本が立っている。花原をつれて逃げる事は十中八九無理だろう。

それに、花原の鬼道もどうやら二十掛けしたみてえだからそうそう

解けるもんじゃねえ。

「俺たちは自主なんかしねえよ。絶対え捕まりもしねえ」

…なんだ…？ こいつらの自信はどこから出てきてる…？

こいつらの頭は捕らえてる。立場は圧倒的にこっちが有利なはずだ。
——だが——。

何だ…？ さっきからするこの胸騒ぎは…！？

「さて…花原さん、動けますか？」

何…だと…？ 松本の鬼道がかかってる…。動けるはずがねえ…！

「オツケイ。全然動けるよー♪」

ギチギチと音を立てて、六杖光牢が外れていく音が聞こえる。松本も必死で押さえ込んでいる様子だが、全く歯が立っていない。むしろ、押されている。

「隊長…！ こいつ…力が尋常じゃないです…！！」

何なんだ…！ この禍々しい霊圧…！？ どっかでほんの一瞬、感じた事のある霊圧…。誰だ…誰からこの霊圧を感じた…！？ 思い出せ…思い出せ…！！

「——っ！！」

そうか…分かった…。アイツから感じた事のある霊圧だ…！

「松本、もういい！ そいつから離れろ…！！」

俺は叫んで、松本のほうに瞬歩で移動し、松本の死覇装の襟を掴んで、無理矢理空中から下降させる。

ちっ…今の今までこいつらの霊圧のせいで気付けなかった…。

花原と同じ…いや、「似ている」霊圧だったせいだからか…だから気付けなかったんだ。

——黒崎の霊圧に…。

名の無い苦しみ

ふざけんな。

なんで、出てきちゃったんだ。

俺と松本の目の前に：そんな面をつけて、そんな霊圧をぶちまけて。

真っ黒い刃が、俺たちの真横を飛んで行く。俺たちはそれが過ぎ去った後の暴風に仰がれて、つい顔の前に腕を広げた。

胃の辺りから下から上へ、下から上へ働く力が僅かながらでもある。並みの死神だったらこの霊圧に当てられて気分を害しているどころじゃ済まされないだろう。

鳩尾^{みぞおち}辺りを死覇装の上からグッと押さえつけ、宙に片膝をつける。

「：松本：平気か：？」

「あたしは平気です。それより隊長の方が：」

俺みたいな小さい器にはこの禍々しさは押さえ込めないってか：。

子供の器には収まりきれねえか、この霊圧は。

くっそ：視界がぼやけて来やがった：！　どんな霊圧ぶちまけてんだ、黒崎は：！

「黒崎、てめえ：何で出てきやがった！」

「うっせえ！　お前のぐらついた霊圧、察知したら来なきゃなんねえだろ！」

「ぐら：」

ぐらついてなんかねえっ！！　そう叫べるほど、自分の霊圧が絶対にぐらついていないという確証が無かった。それ以前に、こいつらの霊圧に当てられて叫ぶどころじゃねえ。これは「吐き気」じゃな

い。それ以前の…何か。まるで鋭い刃が俺の中を駆け巡っているような…そんな感覚。感じた事のない、気持ち悪さ。

「…はっ…」

そんなこと、構ってられるか。死神代行に護られるような、そんな情けねえ事は趣味じゃねえ。グツと片膝を上げて、視線を黒崎の向けた。黒崎を直視しただけでここまで威圧感がある。今の俺じゃ、この場では恐らく足手纏いになるだろう。だったら迷う問題はねえ。花原は黒崎に任せて、残りの二人を俺たちがやる、それだけだ。

「…その面の事は黙っというてやる。…だから、この場は任せられるか？」

「珍しく弱気だな。この虚とも死神とも区別が出来ない霊圧に当てられたのか？ 息、切れてんぞ」

「うるせ。俺の質問に答えろ」

「ったりめーだ、ばーか。用は、こいつを捕らえりゃ良いんだろ？ 散々俺を付け回しやがって」

黒崎の声は、まるでエコーがかかったように聞こえる。面の上からでも、あいつの口角が上がってるだろうことは安易に予想ができる。

俺は任せたぞ、と言い残して、花原から少し身を引いていた二人に氷輪丸の切っ先を向けた。

「…そういや、てめえ等には名乗ってなかったな。…十番隊隊長、日番谷冬獅郎だ。てめえ等の名は何だ？」

俺はそう言い、斬魂刀を肩に担いだ。風に仰がれて、髪が揺れる。風が止まったと同時に、返事が返ってくる。

「名なんてねーよ」

「…何だと?」

「俺たちに、名なんてねえ。俺たちは花原さんの『僕』だ。名なんて必要ねえんだよ」

名乗る名が無い…その苦痛を、俺は更木からたまに聞かされた。その苦痛は、戦いるときに比べれば比じゃなかった、とまで言っていたのをすっかり覚えていた。こいつらは…その苦しみを持っていないのだろうか? …いや、持っているからこそ、花原について「連続殺人」なんて事をしているのだろうか。

「どうしました、隊長さん? 動きが止まりましたね」

「…苦しくねえのか…?」

「…隊長?」

俺がそいつらに向けて放った言葉は、松本にも疑問を与えるものだったのか、松本までもが俺を目を見開いて見つめた。俺は続ける。

「名前が無い苦しむってのは、相当なもんらしいな。聞いた事がある。自分の周りは名前と呼ばれてるのに、自分にはそれが無い。その苦痛がどんなもんなのか。戦いの間だけ、その苦痛から逃れられる。別の痛みを感じられているその間だけ、逃れられる。だから、戦いを——殺しをする。それこそ、見境無く、な」

「…うるせえ」

「本当は苦しいんじゃないのか? だからこうして、リーダーを見つけたら付いていって自分の存在価値を示してる…。違うか」

「うるせえつつつてんだ!!」

俺に怒号を向けて、掌を俺に向けた。赤く、まばゆい光がその掌の

一点に集中する。

——…炎熱系の鬼道、か。

「松本、危害は加えるな。かわせ！」

「隊長：話し合いなんて柄に合ってませんよ？ 元死神と聞いて…同情ですか？」

「うるせーよ、同情じゃねえ。なんつーか：ほっとけねーんだ」

「隊長のその甘いところに、みんな集まってくるんですよ」

松本が微笑んだのが、表情を見なくても分かった。小さく「うるせ」と呟いて、俺は斬魂刀を顔の前に横にして構えて、中腰になる。その場から飛び退く松本を尻目に、俺は放たれた鬼道を刀で受け止めて、冷気で一気に凍らす。ほんの一瞬、辺りに白い空気がめぐり、大きな火の球は昇華していった。

「てめえら：斬魂刀はどうした？」

「捨てたんですよ」

「…捨てた？」

「死神をやめた——」。故に、斬魂刀を捨てた…。理解できますか？」

できねえ、とは即答できなかった。こいつ等の気持ちを考えれば、そこまでするんじゃないのか。ずっと捜し続けて、やっと見つけた。そんな自分達のリーダーがすでに死神をやめ、虚の力に手を染めてしまった以上、そうせざるを得ない…仕方の無いことだったんじゃないのか…？

「…できねえな」

「でしようね」

「けど、それは今の俺の立場からしたら、って事だ」

そこまで俺が言うと、二人の視線は俺に集中した。

「てめえらの立場に俺が立ったら、捨ててるかもしれないねえな。――
――松本」

「はい？」

俺は遠くで観戦している松本を呼び、抜き身の氷輪丸を投げる。松本は慌てて、しかし緊張しながらそれを受け取り、

「隊長！ 抜き身の刀を無造作に投げつけないで下さい！ 危ないじゃないですかっ！！」

と、文句を俺に浴びせる。俺はその様子に少し口元に笑みを浮かべ、二人に向き直った。驚いたように目を見開いて俺を見つめ、尚毅然として立っている俺に、少し恐怖めいた表情を浮かべる。

「どーだ？ これで俺とお前達は『同等』だって事で良いか？ さあ、勝負と行こうぜ」

「てめえ…おかしいんじゃないのか…！？」

「…かもな。若いから経験は少なえとはよく言われるが…それなりの知識は持ってるつもりだぜ？」

そんな事を言う俺に、冷や汗を浮かべながらも掌を俺に向けてくる。こいつら…相当花原に『調教』させられてたんだろうな。

「…待ってろ。今、助けてやる」

二人に向けて、小さく呟いた。

目を覚ませ

俺は鬼道のみを使い、二対一で戦っている。黒崎達の妙な霊圧もあってか、体力の消耗は半端無い。息を切らしながら、攻撃をかわし、繰り出し、受ける。相手は二人とも炎熱系の鬼道得意にしている。圧倒的不利なのは松本も充分承知だろう。だが――…松本は助けに来る行動を全く見せない。

――覚えててくれたんだな、あの『約束』…。

昔、俺は松本に言ったんだ。

「いいか、戦いをする時は一対一が絶対だ。相手が二人でかかってきたときは、迷う事はねえ。俺を信じて、ただ待ってれば良い。俺がくたばったら、その時は全力で逃げろ。隊長が敵わなかった敵に、副隊長が敵うはずがねえ。ただ、自分が生き残る事だけを考えろ」

そう言ったとき、確か松本はこう反論した。

「隊長を置いて、副隊長に逃げろって言うんですか！？ そんな事、絶対にしませんよ、私は！ 隊長のことは信じます。でも、もし隊長が倒れてしまったら…その時は隊長を連れて逃げます」

思わずこの返答に笑ってしまったのを覚えている。まさか自分が殺されるかもしれねえってのにその危険を顧みずに俺をつれて逃げるってんだからな。俺が松本の前で腹を抱えて笑ったのはこれが最初で、最後だったかもしれない。柄にもない姿を見られた、とか思ってもう俺はあいつの前で大笑いする事が無くなったんだ。

「お前等は苦しくねえのかよ？」

「苦しくなんかねえっ!!」

「嘘つくな。苦しいからこそ、今こうやって戦ってる」

俺は眼前まで迫っていた炎を同等の鬼道を放って相殺させる。

「斬魂刀を捨てただあ？ 聞いて呆れるぜ。鬼道の強さがこんだけ甘いんだ。ここ数年まではずっと斬魂刀を持ってたんだろ」

その言葉に、二人は反応した。その動揺を見透かさない。間を置かずに俺は畳み掛けるように二人に語りかける。

「構え方を見ても分かる。その中腰の立ち方、鬼道には向かねえんだ。それは刀の構え方だろ。鬼道の際は片足前にだして前に出した方の足に体重を少しかける。それが一番安定した鬼道の構えだ」

飛んできた火の粉を避け、ふう、と息を吐く。

「あのなあ、お前等も知ってると思うが、俺は氷雪系の斬魂刀の持ち主だ。あんま炎熱系の鬼道放たれると…」

切れている息の中、淡々と文を話していくのは正直きつかった。けど、こいつ等をほっとく訳にはいかねえ。こいつ等の目を覚まさせてやらねえと…。

「熱くて…のぼせんだよ…」

額に少し手の甲を当てて、呼吸を整える。そして、

「いい加減…目ェ覚ましたらどうだ！」

瞬歩で一氣に間合いを詰めて、二人の丁度中間点に着地する。

「鎖条鎖縛」

広げた両手に、黄色い鎖が伸びて行く。動揺して、そして俺に少し恐怖と違和感を覚えていた二人の動きは初動が遅く、絡め取る事が容易だった。二人を捕らえた事を確認して、俺の靈力を流していく。無論、そんな事をすれば鎖が凍って行くのは容易に予想ができる。

「ちよっ…やめろよ!」

「頭冷やせて言ってるんだ。これくらい冷てえくらいが丁度良いだろう?」

俺は少し口角を上げて、構わずに靈力を流し続けた。二人が観念して、ぐったりうなだれてから、俺は視線を二人に合わせて、語りかける。

「お前等の實力はこんな事に使うもんじゃねえ。もったいねえだろ。何であんな奴に付いて行っちゃったんだ」

「あんな奴って言うな。花原さんを侮辱すんじゃない!」
「そうですよ!」

…まだ目が覚めねえか。俺はキッと二人を睨み付け、「そーか、だつたら…」と、靈力を鎖に流す。軽い尋問と拷問だ。

「見ろよ、今の花原…」

俺は黒崎と奮闘している花原に視線を向けた。そこにはおびただしいほどの靈圧を零している花原がいる。

「お前等はあるな姿した自分達のリーダーを見て何とも思わねえのか？ 少しなりとも『異常』って言葉が浮かんだ事があるだろ」
「…」

俺は再び込み上げてきた吐き気に、少し口を抑えた。そして首を振って、吐き気を払い飛ばす。

「苦しかったから、どんなに異常でも、付いて行っただよな？
苦しみに…振り出しに戻りたくなかったんだろ？」

その言葉を言う前からか否や、二人の頬に涙が伝っていた。

「え、ちよっ…おい！ 泣くなって…」

どうもこういう時の対応の仕方が未だに分からない。泣いた理由がイマイチ掴めなくて、俺は更に慌てる。それを見かねてか、松本が俺の隣にフツと現れた。

「大丈夫よ、もう大丈夫。恐怖なんて覚えなくて良いから。このいざこざが終わったら、十番隊に来れば良いじゃない！ ね？ 隊長

♪

「…おう」

俺は松本の言葉に頷いた。

「こんだけ力があるんだ。自信持って良いと思うぜ。名前も考えといてやるよ」

交代の瞬間

「名前…か」

そう呟いたのは、気性が荒い方。言葉遣いが荒い方、と言ったほうが判りやすいかもしれない。フツと、口元に笑みが浮かんでいるのが見えた。計算高い方が、それにクスリと微笑する。

ようやく、目を覚ましてくれたのかもしれない。俺は、そう思う。

松本が、その二人の様子を見て、俺のほうに視線を向けた。

「隊長」

その言葉と、その瞳は、俺に「行け」と言っている。隊長に対して命令か、この野郎。…なんて思ってる暇はねえ。今は早急に黒崎のところへ行くのが優先だ。

すんなり花原のことを任せちゃったが…これは俺の仕事だ。代行なんかにずっと任しておくのは「隊長」としてやってはいけない事じゃないかとも思う。…いや、やってはいけない。つか、俺のメンツが、そんな事やらせねえ。

絶対に、刺し違えてでも、花原をとめなきゃならねえ。俺は松本に小さく頷くと、その場から瞬歩で消えた。

黒崎の霊圧が、肌にびりびりと当たる。それだけで冷や汗がどつと出てくるのが分かった。

「…何やってんだよ、俺は…!」

少し震えている右腕を、左腕で押さえ込む。

——俺は…この霊圧を…恐れてる…?

脳裏に、その言葉が過ぎった。

「…構ってられるか」

自分に言い聞かせるように、その言葉を口にする。

そして、一気に黒崎の近くまで駆け寄った。黒崎に近づいて、やっ
と気が付いた。黒崎は、既に方で息をしていた。あの仮面はつけて
るだけで相当に体力を消耗するもんなだろう。そんなことは、す
ぐに分かった。

あいつは元々人間だ。それがあんな訳の分からねえ力使ってんじや
あ、すぐにガタが来るだろう事は安易に想像できる。俺は、黒崎に
更に近づいた。

「黒崎」

「おう」

「…息、上がってるように見えるが？」

「気のせいだろ」

気のせい？ んなわけねーだろ。俺はそう言って笑ってやった。黒
崎も、それにつられてクスリと小さく笑う。

その時、やっとな気が付いた。仮面が、半分以上割れていて残ってな
い。

「…しよーがねえ」

俺がそう呟くと、黒崎が不思議そうに俺のほうに振り向いた。きよ
んとした眼差しが、俺を見つめている。そんな黒崎の胸板をぐつ
と押して、戦域から放り出した。

「代われ、黒崎。…俺がやる」

「ぼっ…てめっ、この霊圧だけでふらふらじゃねーか！ 戦えるわけねーだろ！」

「…」

俺は無言で刀を構える。そして、黒崎に訊いた。

「…あいつの意識は…いつ頃から無くなってる…？」

「え？ あ、ついさっきくらいだ。ひよっとしたら、まだほんの少しくらいは意識が残ってるかもしれないけど…って…お前、まさか…！」

やっぱりコイツは良いやつだな。心底そう思った。ここまで親切にべらべら喋りやがって。どこまで純粹なんだかな。未だに測りきれない。

「礼を言うぜ、黒崎。悪いことは言わねえ、さっさと松本のトコに戻っとけ」

「ふざけんな！ お前を置いて逃げられる訳ねえだろ！」

「逃げろなんて言ってるねえだろ。松本のところに行けっただけだ」

「同じことだろ！ お前一人に戦わせるわけにはいかねえ！」

こいつが、決めた事を絶対に曲げないって事くらいは理解してるつもりだ。けど…今回は曲げてもらうしかねえ。

俺は目を閉じ、ふう、と息を吐いた。目をゆっくりと開いて何の迷いもなく、黒崎の眼前に掌を広げた。

「松本のところに行きたくねえなら仕方ねえ。ここで大人しく待ってろ」

「ああ！？ 何言ってるんだ、お前…」

「六杖光牢」

黒崎の言葉が終わるのを待ってなんかいらなかった。こうしている間にも、花原の「自我」がどんどん失われていく。考えただけでも、嫌に胸くそが悪かった。何でだかは分からないが、何故だかすつきりもしない。

俺は、鬼道を放ってすぐ、黒崎の文句を聞かないうちに花原の近くまで一気に瞬歩で迫った。

黒崎を、何故俺は松本のところまで連れていかなかったんだろう。連れて行けば、黒崎はあんな事にならなくてすんだはずだった。俺がそう後悔するのは、花原との戦闘中だった。

仮面

「花原！ まだ意識が残ってんだろ！！」

霊圧が、暴風を呼ぶ。強く仰がれて、腕を顔の前にやった。

花原の霊圧が、確実に虚に近くなっている事は、確実だ。

「目エ覚ましやがれ！ お前の『仲間』は、とつくに起きてんぞ！！」

花原が「僕」と言っていたあいづらを、俺は何の意識も無しに「仲間」と言っていたのには驚いた。俺自身、そんな事を言う気なんてほとんどなかったんだ。ひよっとしたら俺は、この重すぎる罪を背負った花原までもを、仲間にしようとしているのかもしれない。

花原の霊圧が、俺を押しつける。

——何なんだ、この反発力……っ！

虚と死神は分かり合えない……。それからくる反発力なのだろうか。磁石のように、強い反発力。

「氷輪丸っ！！」

刀の切っ先から冷気が漏れて、あっという間に氷の竜が出来る。牙を向いて、花原の居る場所まで勢いよく波打って行く。紅蓮の目が、花原を捕らえた、その瞬間。

花原の指先に、赤い光が宿った。その感覚は、間違いない。

「虚閃……だど？」

やけに冷静な自分が、恐ろしくなった。

その赤い光に、氷の竜は砕け散っていく。それでも威力はとどまる事を知らず、俺めがけて、一直線に飛んできた。

「ちっ…」

舌打ちして、刀を右手に持ち、斜めに傾ける。やけに鈍い音が鳴って、その赤い光は屈折した。空へ、一直線に。とどまる事を知らないその威力は、じりじりと俺を追い込んで行く。

片手で長時間止められるもんじゃねえ。俺は、空いている左手の指先を、花原に向ける。

「白雷！」

その光は、その言葉とともに飛んでいった。それが花原に直撃したのは確認できる。だが、花原が攻撃をやめることは無かった。再び、虚閃の嵐が降り注ぐ。

「…もう、俺の声は届かねえのかよ…」

不思議と、その声に怒りがこもる。

俺は、刀を両手で持って、ずっと虚閃を弾き続けた。

…が。

いい加減、俺の堪忍袋の緒が切れる。そんな事、自然の道理だ。やられっぱなしでいてられる訳がねえ。

やられたらやり返す。俺がガキの頃、本能のままにやってた事が、今、蘇ってくる。

「…なりふり構ってられるか」

ポツリと呟いて、俺は瞬歩をして、花原の正面まで移動する。虚閃が、それと同時にピタリとやんだ。白刃の刃を花原に向かって振る。次から次へ、次から次へ。止まる事無く、ずっと、ずっと。

花原の身体は、最早、人の形を成していなかった。どっから見ても、完全に虚。

「戻ってきやがれ！ 虚なんか力を預けんじゃねえ、肉体は**これ**はお前の身体だろ！！」

キーン、と刀が弾かれる音が辺りに反響した。予想以上に刀が大きく弾かれて、一瞬、俺の懷は、がら空きになった。

それを、相手が見逃すはずは無い。

刀よりずっと鋭い、「爪」のようなものが、俺のわき腹を貫く。鮮血が、下へ、落ちて行く。

「冬獅郎っ！！」

遠くで、黒崎の声が聞こえた。相当遠くにいるはずなのに、アイツは敏感すぎだ。仲間の危険を察知する事に関しては、死神一的能力だろう。きっと。

——まずは自分の怪我を心配しとけよ。

そう言っただけでいい。だが、そう思う俺も、黒崎と「同類」なのだろう。人のことは言えない。

俺は、その突き刺さっている「爪」を、片手で掴む。

「…二度も氣イ失うわけねえだろ…。舐めんな」

掌に、血が伝うのが分かった。

けど、んな事気にしねえ。構わず強く握る。ビリビリと電気が流れたような感覚が、腕を伝って襲い掛かってくる。そうなるまで、痛

みを感じなかった。それくらい、無我夢中だった。

「これでもう、動けねえよな？」

荒い息で、俺はもう花原とは呼べなくなった相手に、そう言う。

花原の仮面に、思いつきり刀を付きたてた。

ピシッ、と仮面が音を立てて割れる。花原の黒崎に似た明るいオレンジ色の髪が、俺の目に映り込んだ。

夢の予言

「ぐっ…」

俺は、刺さっていた爪を引き抜いた。それは、花原の動きがピタリとやんだから。だからと言って、花原が俺を殺さねえ確信はねえ。気は抜かないで、その場に立ち、花原を見つめる。さつきから、ピクリとも動かない。

「…起きろよ。まだ勝負は…付いちゃいねえだろ」

そう言うのと、身体が反応する。意識がない事は無いのだろう。だが、消えかかっている事は確かだ。

ここまで弱っているやつを見ると、手を貸したくなる。そこが俺にとって悪いとこなんだろうと思いつながら、俺は花原の腕を自分の肩に掛けた。

「おい、聞いてんのか？ お前の仲間が待って…」

ゾワリ、と悪寒を覚えたときには、もう遅かった。ハッとして下を見つめると、わき腹の辺りに刃の切っ先が見える。

——後ろから、貫かれたのか？ 俺…。

そんな呑気な推測なんて、してる場合じゃない。耳元で、小さな笑い声が聞こえた。

「だから貴方は弱いだよ。そうやって、情けを見せるから」

乱暴に、刀が引き抜かれる。どうやら急所はまぬがれているようだが、出血が止まらねえ。純白の羽織が鮮血に染められて赤くなって

いく様子を、俺はぼんやりと見つめる。

「…次が、最後の一撃になるのかしら？」

——来る…。

そう分かっていても、指先がしびれて、刀を強く握れねえ。腕も動かねえ。

風を切る音が耳元まで迫った、その時。

金属音が俺の鼓膜を凄い勢いで揺さ振った。

視界に入ったのは、黒色の死覇装と、オレンジ色の髪。それから、感じ慣れた霊圧。

「黒…崎？」

「何してんだ、冬獅郎！！」

その声が、やけに腹の傷に響いた。

ギリギリと刀と刀が交じり合う音。確実に黒崎が押されている。さっきの仮面で体力なんてほとんど無えくせに、何やってんだよ、こいつ…！ いや、それ以前に…。

「何してんだ、はこっちの台詞だ！ 鬼道を自力で解いたのかよ！？」

「ったりめーだ！ 仲間の危機にそれくらいやんねえでどうすんだよ！」

威勢の良い言葉を言いながらも、黒崎の息はとっくに切れてる。肩で呼吸をしている上に、荒い。鬼道を自力で解いてきたんだから、疲労の蓄積量は測りきれないだろう。なのに、俺を助けるか、普通？

「あら、面白い。まだあたしとやろうっての？ 無理よ、どんなに頑張ったって、貴方達に勝利の兆しは無い」

花原は、挑発的に言い切り、刀の切っ先を黒崎に向けた。

「まずは貴方から…あの世に送ってあげるわ」

「はっ…」

今にも、黒崎は飛び出していきそうだった。

俺の予感は的中して、すぐに漆黒の刀を振りかぶって花原に向かって駆けて行った。

花原は俺たちよりはるかに強い。そんなこと、あいつにだって分かってるはずだ。なのに…。

「やめとけ！ 死ぬぞ！！」

不意に、叫んだ。瞬間に、過去に見た夢が思い出される。

——漆黒の刃を持った死神が、敵に向かって駆けて行った。その敵は、俺たちよりもはるかに強い。そんな事、あいつにだって分かってるはずだ。

「止めとけ！ 死ぬぞ！！」

いつの間にか、俺は叫んだ。そうでもしないと、あいつは止まらない様な気がして。叫んだところで、止まる奴じゃない。そんなことは分かりきってるのに、俺は叫んだ。

「黒崎!!」

その声はただただ反響するだけだ。あいつの目には今、『護るべきもの』しか映ってない。真剣な眼差しだった。黒崎の姿が、俺の目に映り込む。

次の瞬間。

黒崎の身体から、真紅の血が、まるで噴水のように噴出していた。

——嘘、だろ…？

思った言葉は、これ。こんな偶然、ありえない。ここまで合致するもんなのか、夢って？

嫌な予感がして、はっと黒崎の方を振り向く。そこには、夢の通りに、真紅の血を吹いた黒崎の姿があった。

俺の心臓が、ドクン、と跳ね上がった。

夢の予言（後書き）

この小説も多くの方々に読んでいただいております。
本当に嬉しいです（^^＊

と！　　いうわけで：今回は皆様にアンケートを実施しようと思いま
す♪

詳しくはこちら↓<http://ameblo.jp/runak>
k／

隊長の意地 副官の敬意

「黒崎！」

気が付いたら俺は、ふらふらの動かない身体で黒崎のところまで移動している。

花原との距離は、ほんのわずか。一步近づいたら、俺まで切り殺されるんじゃないかって言うくらいだ。

「た…隊長！」

松本の声が聞こえて、その霊圧が近づいてくるのもよく分かった。

花原の瞳が、静かに動く。

———まずい———！！

反射的にそう思った。黒崎を肩に担いで、刀を構えた。

松本の元に着くのは、俺が先か、花原が先か…。

ギャンツ、と金属同士が擦れる音が鳴り、刀が横に流される。

俺の髪が刀にあわせるように横に流れる。何とか、松本と花原の間に割り込む事が出来た。

松本が呆気にとられたようにその場に立ち尽くす。

「あら、よく動けたわね」

花原の冷酷な目が、俺に向けられた。

息が上がる。刀を持っている腕が、わずかに震えた。

「隊…」

「松本」

言葉を遮って、黒崎を松本にそっと渡す。血は出ちゃいるが命にまでは関わらなさそうだ。ちゃんと呼吸はしてるし、気を失ってるだけだろう。

「任せた。こっから離れろ、出来るだけ遠くに、な」

「隊長っ…！」

悲痛な声が聞こえて、少し気の迷いが出る。それをぐっと押さえ込んで花原に刀を向けた。

冷気が出て、俺の上がった息が白くなっていく。

「早くしろ、松本」

「…けど隊長！」

「いいから！」

言葉が荒くなってくる。俺は一回叫んだ後、再度淡々と言葉を繋げる。

「隊長には隊長としての意地がある。副官のお前に、隊長がやられていく過程なんて見せたくねえ」

俺がそう言って、一歩前に踏み出した。

その瞬間、松本が意を決したように、口を開く。少し、その声は震えていた。

「隊長に隊長の意地があるなら…あたしにも副官としての敬意があります」

「…」

凜とした蒼色の瞳が、ひた、と俺を捕らえた。俺はその感じに耐え切れなくなり、スッと目を閉じる。ついでにため息をついて花原に向き直った。

「敬意があるならさっさと行け」

松本が動かない事に気がつき、俺は困って咄嗟に「絶対え戻るから」と付け足す。

それを聞いて安心したのかどうかは分からないが、とにかく松本は黒崎を抱えた。そして、霊圧がどんどん離れていく。

花原が、松本が行ったのを確認してから、身構えた。

どうやら、不意打ちと言うのは好まないらしい。

「絶対戻る？ 戻させないわよ」

「さあ…？ 俺は有言実行する方だからな…分かんねえぜ」

そう話している間にも、どんどん辺りの気温が下がっていく。

「強気な事を言っている割りには息、切れてるけど？」

「っせえ…」

確かに息は切れている。

こっちに分があるとも思えねえ。

普通に考えて、俺が負けるのは安易に想像できる。

「けど…だからと言ってこの場から逃げることなんてできねえ。そうだろ？」

「…分かってるのね」

何かを合図にしたかのように、俺と花原は何度も切り結ぶ。鈍かったり、高かったり。様々な音が俺の鼓膜を揺さ振り、その度に腹の傷に妙な波が響く。

惜しい所をかすり、ギリギリのところで避ける。息はもちろん上がるし、徐々に腕の力も落ちてくる。一旦、距離を開けたほうがいいのかも知らない。

「破道の三十三、蒼火墜！」

刀を受け止めた瞬間に、詠唱破棄で繰り出した。花原が飛び退いて、俺との距離を開ける。

「…当たんなかったか。少しは当てる気、あったんだけどな。反射良すぎだぜ…」

「あら、意外ね。あたしの事褒めてくれるなんて。けど」

フツと掌が俺のほうに向けられた。

「あたしが『元』死神だって事、忘れないでくれる？」

蒼い色をした、不気味な炎が俺の目の前で見る見るうちに大きくなっていく。

「蒼火墜」

「——ちっ…」

刀で受け止め、方向を無理矢理に変える。今この場で無駄な靈力を使えば、確実にやられてしまう。

「いいのかしら？」

「何？」

隊首羽織が火の玉の飛んできた勢いの暴風ではためく。バサバサと騒がしいほど音が立ち、何かを知らしているようだった。

花原の言葉に、俺は反応して、再度刀を構えた。

花原が、俺から視線を逸らし、飛んで行った火の玉を見つめている。

「『仲間』がいるんじゃないの？　——ああ、あたしの僕、だっけ」

自我

何やってんだ、俺は…!!

あいつ等を死なせるわけにはいかねえ。もう俺の『仲間』なんだ。約束したろ、名前を付けるって…。

あいつ等は…!!

「氷輪丸っ!!」

刀の先から、見る見るうちに氷の竜が現れた。

花原が放った蒼火墜があいつ等二人がいるところに追いついてしま
うのが先か、それとも蒼火墜に竜が追いついて炎が凍るか。この二
択しかなかった。

だが、確実に俺が放った竜はタイミングが遅すぎだった。追いつく
見込みは、無い。

「くそっ…!!」

宙を強く蹴り、前方に飛び出す。すぐに、二人の影が見えてきた。

俺が鬼道で縛ってたんだ、動けるはずもねえ…!

一気に加速して、髪が後ろに流れた。隊首羽織も靡なびいて、ばさばさ
と音を立てる。

それがやけに俺の心に焦燥感を抱かせた。

「てめえら! 伏せてろ!!」

俺は刀を構えて、蒼火墜と二人の間に割り込んだ。刀でそれを受け
止めたその後、数秒して俺が出した竜がその炎を昇華させる。

その場には蒸気が上がり、視界を少しだけ曇らした。

「大丈夫か？」

「あ…ああ…」

「悪いいな、縛りっぱなしだったか…。待ってろ、すぐ解いてやつから」

てっきり松本が解いているもんだと安心しきっていた俺は、拍子抜けした。

集中力が一気に抜けた感じだ。その場に方膝を付いて、その黄色い鎖に手を掛けて引き千切った、その時。

「後ろ！」

「……っ！」

二人が、一斉に俺に叫んだ。

霊圧なんて、全く感じなかった。

そりゃそうだ。花原は霊圧を消していたんだから。

刀を構えようにも、何しろ初動が遅れた。俺の全てが、花原とワンテンポずれていた。

俺の視界に、銀色の光がきらり、と不気味に光る。

——ああ、俺、死ぬんだな。

呑気に、そう思った。このまま刀に突き刺さっちゃうんだろう、と、まるで他人事のように。

刀がやっと前に出て、構えられたその瞬間。

俺の刀には、何の衝撃も伝わってこない。ただ、純白の羽織に、血の華が散った。

——俺の血じゃない。

まず思ったのはそれ。

…だとすると…。

「花原さん…もうやめにしようぜ…」

はあはあと息を切らした二人が、俺の前に立っていた。

二人の足元から、地面へ。

ただ吸い込まれるように赤い液体が滴り落ちている。

「…もうこれ以上…貴女のこんな姿は…見たくないんです」

ふっと足が曲がったかと思うと、二人は宙を抗うことなく真っ直ぐに落ちていった。

まるで、死んでしまったかのように、ただ、真っ直ぐと。

「…え…?」

死んで、しまった…?

俺は、俺が思った事に疑問を持った。

俺をかばって、死んだってのか?

「嘘、だろ…?」

俺は二人が墜落した所に駆けつけようと、腰を上げた。

まだ、息はあるかもしれない。

俺の鬼道で、応急処置くらいは出来るかもしれない。

あいつ等は、まだ助けられるかもしれない。

そんな思いを抱いていたから、すぐにでも駆けつけたかった。

それが出来なかったのは、花原の刀が不意に揺れ始めたから。カタカタと、細かく、小さく。

その銀色の刀は、赤く赤く、ただ血に染まっていた。

俺はその様子に違和感を覚える。

さっきまで何事も無かったかのように真っ直ぐでぶれの無かった刀が、今揺れているのだから。

「…花原？」

「違う…」

小さく、言葉が聞こえた。

「あたしじゃない…」

その言葉が、涙に滲む。

花原が、二人の下へ、降りて行った。

——もしかして…。

考えが、一つ過ぎった。

——自我が…戻った…？

届かぬ叫び・届いた言葉

花原の背中が、どんどん小さくなっていく。ちかちかと町の明かりが目障りなように、俺の視界にちらつく。

「くそっ…！」

俺は宙を蹴って、花原の後を追いかける。花原の背中が、ぐっと近くなった。

「おい、起きろっ…！」

二人の頭を持って、叫ぶ。その声は虚しく空気を泳いで、無常にも消えて行く。二人に届く間もなく、それは掻き消えていく。次から次へ、次から次へ。

二人の体温が徐々に下がっていくのなんてよく分かる。もう助からないのも、いやというほどよく分かった。後ろで花原が呆然と、つつ立っているのだった。それから――…。

「花原…お前、泣いてないで最期くらいこいつ等を見送ってやったらどうだ。…仲間として、見送ってやれよ」

二人の頭を、俺は静かに下ろす。二人から流れ出た、俺に付いた血を、拭おうとは思わなかった。花原が二人を見下ろして、涙を流す。ただ、その光景を眺める事しか、俺に出来る事はもう無い。そんな事、分かっている。分かっている、けど…分かんねえ。信じたくねえし、現実から、目を逸らしたかった。

「…花原」

「嘘」

ポツリ、と雨が俺の頬を叩く。

花原の声が、雨に掻き消えそうになった。俺は、もう一度、名前を呼ぶ。この現実を、認めさせてやんねえと、意味がねえ。

「花原」

「嘘…！」

花原が、両手で顔を覆う。雨脚が、より一層強くなってきた。俺の立っている場所は、二人から流れた血が、水にとけて川のようになっていた。鬱陶しいくらい雨の音が、静かに、二人を叩いている。もう、何の反応も示さない。

「嘘…っ」

ただ、何度も、何度もその単語を言う花原を、見てられなくなってくる。グッ、と拳を握り締め、自分の無力さを実感する。

「…現実を見ろ。そんな事を言ったところで二人はもう生き返りはしねえんだ」

「…あたしが、やったこと…？」

花原が、まともに喋り始めた。…だが、まだ自分が犯したことの重大さを、つかめていない。信じていない。

雨で、視界が狭くなってくる。雨と一緒にこのもやもやした気持ちも流れて行くと思ったが、こんなもん、ハッキリ言って逆効果だ。ただただ、鬱陶しい。

花原の問いに、答えるのが怖い。頷きたくないが、これは、真実だ。

「…ああ」

「そう」

キラリ、と花原が刀を掲げた。スツと、それが花原の胸に当てられる。視界がぼやけているが、何をしているかなんてよく分かる。

「待て！ お前…何考えてやがる！！」

俺の声は、もう届かない。花原の腕に、力がこもった。

暗い影しか、もう見えないほどだった。花原と思われる人影に、深く突き刺さり、貫通したと思われる刃。その後、シンメトリーのように、前からも後ろからも血が噴出す。パパツ、と俺にその血が降りかかったその直後、雨がそれを流してくれる。どしゃり、と俺の目の前で、花原は崩れ落ちた。三人の死体が、重なる。

「…バカヤロウ」

白い光が、三人を覆った。

「死んだら何もかも…無くなっちまうじゃねえか…」

ぱらぱらと、崩れて行く。霊子となり、視覚化されないまま、三人は、消えて行った。

「思い出も…何もかも…無くなっちまうじゃねえか…！！」

俺の叫びは、もう誰にも届かない。そんな事、よく分かってる。でも、叫ばずにはいられない。

「何で…死んじまうんだよ…っ！！」

雨が、俺の髪を濡らす。そのせいか、肩がずっと重くなった。雨の音が、やけに大きく聞こえる。嫌な音だ。

「隊長」

松本の声が、後ろから聞こえる。…そうだ、黒崎…。あいつは…？

「何て顔してんだよ」

「…あ？」

井上織姫の霊圧を僅かに感じられる。治してもらったのだろう事は簡単に予想できた。俺の前に堂々と立ちやがって、説教でもするつもりかよ。

「こいつ等が死んだのはお前のせいじゃねえだろ」

「…」

何言ってるんだよ、全部…俺の無力のせいじゃねえか。俺がもっと強ければ、俺がもっと、こいつ等を護れるくらいの力を持っていれば、こいつ等は死なずに済んだじゃねえか。

後悔の念が、無力である事の羞恥が、一気に俺を襲う。下へ、俯いた。

「冬獅郎の無力のせいでこいつ等は死んだわけじゃねえ。結局こいつ等は、自分達で選んだ道をたどって、そして最期は一緒に逝けたんだ。それで、いいんじゃないやねえのか？」

「…いいわけ…ねえだろ…」

思わず、本音がこぼれる。だが、このまま俺の心の中に留めておく

事もできねえ。次から次へと、その言葉は流れて行く。とても押さえ切れそうも無い。

「こいつらは…生きてたらまた…仲良くなれてたかもしれないねえんだぞ！ もう、全くの上下関係のない世界で、悠々と…こいつ等の好きなように、生きてられたかもしれないねえんだぞ！！ 俺がもっと強かったら…三人の未来を壊さなかったはずだ…！！」

「隊長…」

松本の声が、俺の鼓膜を揺さ振る。

何をムキになってんだ、俺は。だから甘いって言われんだ。隊長は常に心を見せてはならない。常に冷酷で、凜と死神たちの頂上に立っていないければならない。それが隊長なんだ。

深呼吸して、気を落ち着かせる。俺は松本と黒崎の間を通り、今はもう無い、三人の死体があった場所へ、俺は歩み寄った。その瞬間。

「ありがとう」

声が、聞こえた。

「――…っ」

有り得ない。死んだ奴の声が聞こえるなんて。でも、確かに聞こえた。花原たちの声が、しっかりと。

すうっと、心のもやもやが晴れ渡って行く。鬱陶しい雨も、そう感じなくなっていた。しっとりとした風が、濡れている俺の髪を、かき回しながら流れて行く。

「…松本」

いつものように、腕を組んだ。これで、俺は安心して帰れる。納得、出来たんだ。黒崎が言ってた事に。

「帰るぞ」

今度はちゃんと、その声は、相手に届いた。

エピローグ

「松本！」

俺は、珍しく息を切らしながら隊舎室に駆け込んだ。松本が、何か、というような顔でこちらを見る。蜂蜜色の髪の毛が、ふわり、と柔らかそうに揺れた。

「どっ：どうしたんですか、隊長？ そんなに息を切らして：」

「悪い、今日は帰りが遅くなる！」

それだけ言うと、俺はパンツ、と乱暴にドアを閉めて、その場を駆け出した。ザアッ、と風が俺を優しく向かい入れる。追い風が、気持ちいい。

——西流魂街第一地区、潤林庵：。

俺と雛森が生まれ育った場所。そして：

「ばあちゃん、ただいま」

「冬獅郎、おかえり」

ばあちゃんが待っている場所。

久しぶりに、帰ってきた。俺がボロボロで瀨霊廷に帰ってくると、総隊長が「ゆっくり休め」とか何とか理由をつけて、俺を休ませたんだ。俺はこうでもしないと、仕事を休む事をしないからだろうが：。わざわざ命令する事もねえだろうと思う。

「珍しいね、どうしたんだい？」

「いや、珍しく休みがとれたから…。そういや、雛森は来てるのか？」

草鞋を脱いで、部屋に上がった。天上が俺の執務室よりずっと低かった。俺が子供の頃は、もっと高かったような気がする。…そう思うって事は、俺の身長が伸びたって事だろう。

懐かしい匂いがして、落ち着く。いい頃の思い出が一気に蘇る。

「いや、桃は最近来ないねえ…。遊びに来る子供達なら増えただけだ」

「子供？」

今まで部屋が懐かしくて眺め回していたが、その単語で、俺は赤ちゃんの目を、今日初めて真っ直ぐと見つめた。

——ああ。

昔から変わってない。あの優しくて、温かい瞳は。俺は小さい頃から、あの優しい瞳に助けられたんだ。

「おばーちゃんっ!!」

元気で威勢のいい声が、俺の後ろから聞こえてくる。黄色い声だ。数人の子供が、ワーツ、と駆け寄ってくるのがよく分かった。

明るい金髪が、俺の目によく止まった。

こいつ——…。

「ああ、冬獅郎、丁度良かった。この子達だよ」

「…元気な子供達だな」

俺のことを、四人の子供達はなんの邪気も無い、純粹で真っ直ぐな目を向けて、見つめている。

——そっくりだ。

「ねえ、おばーちゃん、このお兄ちゃん…誰？」

「この子はねえ、おばあちゃんの孫だよ。今は隊長さんなんだ」

「へーっ！！　すごーいっ！！」

四人の尊敬、みたいな眼差しが、俺を向いた。

「ねえ、あたし達も死神になれるかなっ？」

「——…ああ、なれるぜ。簡単な事だ」

ただ、と俺は続ける。

「仲間の命は粗末にすんじゃねえぞ。仲間と決めたからには何の上
下関係もねえ。命がけで仲間同士の命を護らなきゃならねえんだ」

ついこの間俺が学んだ事を言っても、こいつらには到底理解できね
えだろう。口をあんぐりとあけている。少し…難しすぎたか。だか
ら俺は松本に不器用だ、って言われるのかもしれない。

「ばあちゃん、こいつら…名前は何？」

座っている俺の背中にまわり付いている子供達から視線をずらし
て、ばあちゃんのその優しい瞳をずっと見つけた。ばあちゃんが、
ゆっくり口を開く。

「その金髪の子がいるだろ？　その子が、花原舞桜、って言うんだ。
それから、その黒髪の子。ギラって呼ばれてる」

「…そう、か。やっぱり」

俺は頷く。やっぱり、そうだったんだ。

「他の子達に、名前は無いのか？」

「そうだね」

俺は、これ wait してたのかもしれない。急にばあちゃんの家に行きたくなったのは、これのせいかもしれない。

「…俺が、名前つけてもいいか？」

俺の急な提案に、ばあちゃんは一瞬戸惑ったが、すぐに「いいよ」と優しい声で言ってくれた。「ありがとう」と小さく言って、残りの二人に、目を合わせた。

「眼鏡かけてるお前は、えんりゆう炎竜。で、態度が悪そうなお前は、えんしょう焰衝。二つとも松本が付けてくれた」

由来なんて知らない。ただ、火炎系の鬼道が得意だったから、「炎」とか「焰」とか入れたかったんだろうけど。けど、ちゃんと真面目に考えてくれたかどうかは知らない。ただ、俺はこの響きが何となく気に入っていた。…俺の隊に配属したら、何かカッコよさそうだし、なんていう理由もあったり無かったり。

「まつもと？ 誰だよ、それ？」

「大人にそんな言葉遣いはダメですよ！」

思わず、やり取りに笑ってしまった。

…大人、か。

こんな小さな子供から見れば、俺は充分に大人の部類なのだろうか。何だか嬉しくなる。

「気に入らなかったら捨ててもいいぜ、この名前。けど、捨てたらお前等が死神になった時に俺の隊に配属してやんねえからな」

と少し意地悪を言って、その場を立つ。ばあちゃんが、俺のほうを見た。

「もう行くのかい？」

「ああ、これ以上長く居ると、どこもここから出て行けなくなりそうだから」

懐かしすぎて、ここにずっといたくなっちまうから。

そう言いたかったけど、どこか恥ずかしくて、背中の辺りがむずがゆくなった。草鞋を履いて、しっかりと紐を結ぶ。

「また、甘納豆送ってくれよな」

立ちながら、ばあちゃんの目を見ずに言う。見たら本当に、戻れなくなりそうだったから。

「お兄ちゃん」

後ろから、声がした。明るさからして、多分花原。

「何だ？」

俺は、つま先をトントン、と地面に叩く。引き戸をカラ…と開けると、ぽかぽかと暖かい光が差し込んだ。

「あたし達、絶対お兄ちゃんの隊に入隊するから！」

弾んだ声が、聞こえてくる。そんな甘い道じゃないということは、俺だってよく分かってる。けど、こいつらなら、なんていう気持ちに少しあった。こいつ等の感覚、間違いない。俺がついこの間まで戦った奴等なんだ。霊圧の質も、外見も、まんま、あいつ等だ。だとしたら。

二度も同じ道を歩ませる訳には行かない。俺が直属の上官になって、今度はちゃんとした道を歩かせてやんなくちゃいけない。それは、俺の義務だ。

「…ああ、楽しみにしてるぜ」

漆黒の死覇装の襟を正して、俺は一步、家を出た。

そして、気持ち揺らがないうちに、その場を瞬歩ではなれ、暖かい光に包まれながら、隊舎の大きなドアを、勢いよくあけた。

f i n . . .

エピローグ（後書き）

超長編もようやく完結しました（^^；

諦めずに読んでくれた方、

本当にありがとうございます（^^＊

さあて、次の長編はどうしよっかなあ♪

…それより前に、溜まりに溜まっている残りの小説を完結させなくては…（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0301g/>

BLACKMOON

2010年10月13日11時25分発行